話は意外にも岐路に外れたが、之を要するに妙心寺が今日の隆盛を齎らしたのは、彼の經濟の點に注意したのと、次ぎには妙心獨立の眞風を擧揚して、活禪を活地に活用した、此の二原因に外ならぬ、此二原因より漸次妙心が他山を凌ぎ初めてから、他山の僧侶が岡燒き半分に云ひ傳へたもの、是れ「妙心寺の算盤面」である、實際妙心寺は現今でもその遺嵐があつて、能く觀察すると、如何にも算盤面な所がある、然し乍らその算盤面は在家一流の算盤面でなくして所謂活禪を活地に實用した算盤面である、卽ち隻手の影が算盤珠に現はれて、一文錢を三萬兩に使ひこなす算盤面である、故に此算盤面を一國の財政に活用すれば、一國が富み、一家の經濟に應用すれば、一家が富むと云ふ、極めて調法な算盤であるが、併し此算盤は三十年飽參の老古佛でなければ使へない、妙心は此算盤面で、遂に今日の隆運を招いた。

二原因

隻手の影

禪道匡

中篇

匡道禪師逸話

妙心寺前管長蘆匡道和尚は、「五住妙心」とて、五たび妙心寺に住した近世禪門の碩德である、師がその幼少時代に於て、又初行脚再行脚に於て、如何に苦勞され、又如何に發憤されし歟、知る人ぞ知るであらうが、知らない人の爲に、二三有益な實話を紹介して見る。

禪師幼時の貧狀

師の父は元と眞言宗の大本山教王護國寺、卽ち京都東寺の譜代儒者であつたが故有つて浪人の身となり、堺浦に漂浪中、一男一女を携へて、其妻と共に所有る

世の辛酸を嘗め盡した人である。その一女とは他日師が住職地たる、大阪高津の少林寺にて、法體染衣の身と成つた、壽貞尼の事で、一男とは本篇の主人公卽ち匡道和尚其人である、師は五歳にして父を喪ひ、七歳にして少林寺に入り、月窓和尚の弟子と成つた、當時師の鄕家は父歿後貧は益々貧を加へ、その極度に達した、師得度の砌り、母に暇乞せんとて一日鄕里に歸りし時、母は有り合ふ御所柿五箇を出して、それを師匠月窓への手土産と成さしめし外、愛兒を餞するに一物も無ければ、茶漬一碗さへ、與ふることの出來ざりし、悲風慘雨の極であつのである

月窓和尚

而して一方少林寺の貧乏も亦之れに劣らず、壁は破れ、雨は漏り、勿論衣食にも困ると云ふ有樣であつたから、師匠の月窓は自分にも可然き內職を爲し、別に師には夜間竊に道頓堀の芝居小屋に到らしめ、興行師に賴んで幕引を爲さしめ、以て僅かの糊口の資を得た而已ならず、その往くさ還へるさには、紙屑拾ひまで

幕引

させて、一文二文と積まれたと云ふやうな有樣であつたのであるから、師が夜更けて芝居小屋より歸つても、固より暖き蒲團のあるでもなければ、煎餅のやうな薄ッぺらな蒲團の裡へ、師弟背中合せにして、もぐり込み、以て華胥に入る恆例であつたと云ふから、其貧狀は推して知るべきであつた。

師弟背中合せ

禪師の初行脚

卽ち師は右の如き、困苦の裡に惡戰苦鬪して成人したのである、これが若し世間普通の尋常漢であつたならば、疾くの昔に市井の色に染みて、後來德器成就抔は、夢にだも見られる筈がないが、幸なる哉、行應大德の下に二十年間常侍を得て、修行成熟せる、師の月窓が就て居り、師にも亦可然き器量があつたればこそ、師は後來玉成したのである、で月窓も夙に惠潭（師の諱）は尋常の器に非ずと看て取り、痛く鍾愛し、孳々として鞠養する內、春風秋雨十餘年、師は遂に年

惠潭

齒弱冠を迎ふるに到つた。

人生二十歳と云へば、血の湧く青春時代である、壯意勃々たる惠潭坊、何條師の許しを待つべき、況んや小僧時代を貧苦の裡に送くり、碌々學問をもせざる身の、責めては修行なりとして、後ちには天晴れ大地名藍に住せんと、志望徒らに大なる這の壯漢をやである、で師は一錫飄然、時もあらば逃げ出さうと云ふ氣がほの見えた、が師の月窓烱眼早くも之を看破し、一日機を得て篤と訓誡する考へであつた處、或夜のこと、師小便に托して脫走を企て、一歩室外に踏み出た其時此時、圖らずも師の誰何に會うた。

「惠潭何處へ往くのぢや。」

「小便に往きます。」

「ナニ小便に往く……小便に往くなら、韋駄天樣の棚に二匁あるから、用意に持て往け。」

ヨモヤと思つて居た師匠は、疾ッくに看破して、唐突けに一喝を喰らつた惠潭坊は、大に喫驚し乍らも、尙ほも大膽に「そんなものは要りませぬ」と云ひ〳〵逃げ出すを、師匠の月窓は忽ち煎餅蒲團を蹴飛ばし、起つて自ら件の二匁を攫み取り、「持て往けと云ふに、聽かずに逃げ出す不孝者は、師匠の死に目に會ふと思ふなよ」と、師の後姿を目蒐けて、例の二匁を抛げ附けたれば、流石の師も、師匠の慈悲に數行の涙を禁じ兼ね、嗚呼勿體ない、辱けない、本師師匠なればこそと泣く〳〵二匁の金を押し戴き、師匠が伏し戸に入りし後影を、幾度も〳〵伏し拜みて、美濃は天澤の僧堂指して落ち去つた。

侍者中の苦心

大阪脫走後、師は晝夜兼行して天澤僧堂に往き、許されて同寺に錫を掛くるや居ること年餘にして、擧げられ侍者と成つた。

棟林和尚

當時天澤の師家は、棟林和尚と云ふ人であつた、師は棟林の侍者となり、之れに奉侍すること、懇懃周到、所謂痒い所へ手の届く仕方であつたから、棟林も大に望を嘱し、努めて啓發に怠りなかつたが、棟林和尚には一種の癖があつた、その癖とは三度の食事に異味を好むと云ふのである、故に師はこれが爲に種々苦心されしが、何を云ふにも枯淡なる僧堂生活のこと、殊に師家と雖も、支給上限度のあることなれば、毎日の副食物思ふに任せず、已むを得ぬ處より、獨り托鉢に出でゝ、供物を漁り、以て師家の口を怡ばすと云ふ風であつた、處が何時しか此事人の知る處となり、後ちには七八人の特志家出で來りて、種々の供物を供養して呉れるものも有つたさうで、それより稍々乏しきを補ひ得たと云ふことである。

一日に廿里

尚ほ師が棟林に隨從中、師は二週間に一度宛、京都なる福井丹波守の邸へ服藥を貰ひに往かれた、(棟林師尿道疾痔疾の爲)、其都度一日に二十里を歩き通して三日に美濃京都間を往復せられた、けれども師は是等の苦辛も更に意とせず、和尚

一大難事

に師事すること三年、其間參禪辨道更に怠りなく、朝參暮請、孜々として參究する内、修行事も餘程進境して、稍々手答へを覺えける頃、茲に又師の身上に一大難事が降り掛つた。

本師危篤の特報

本師の危篤

或日のこと、赤紙の附箋せる一封の書翰が、師の兀々默坐せる七尺單前に運ばれた、是れぞ言はずして知る一大事の特報である、蓋し德川時代には、手紙に赤紙の附箋せるは、人生の大事を報ずる注意方であつたのである、師は早速に開封した、見れば何ぞ圖らん、本師月窓の危篤を報ぜる、法類國恩寺和尚よりの報道であつた、是に於て乎、師は取るものも取り得ず、棟林の許可を得て、早速大阪へと急行した。

本師危篤の特報

師道中熟ら〳〵以爲らく、「我れ脱走の砌り、本師の勘當を受けたれども、爾後

三年密々に修行して、多少の所得ある今日ヨモヤ本師は吾れに相見叶はずとは言ふまじ」、と軈て大阪に著き國恩寺に驅け付くれば、國恩和尚は正に讀經の最中である故に玄關の式臺に腰を下ろして待つて居ると、國恩和尚最後に回向して曰く

「少林月窓和尚禪師」と、是れを耳にした師は、ハテナ本師は死亡せるか、思ひ起す脱走の當夜、師匠が「貴樣のやうな奴は、師匠の死に目にも會はぬ不孝者」と言はれたが今はそれが事實と成つた歟、ヤレ殘念！」と、我れを忘れて慟哭して居ると、その聲聞き付けて、國恩和尚は玄關に出で來りヨー歸つたかの挨拶もなく、「オ、惠潭か、和尚は死んだぞよ」と聞かされて、更に一層悲泣し、泣き崩れるを惠潭坊の師が、漸う〳〵に頭を擡げ、「恩師！」誠に濟みませなんだ、生前に和尚の顏が一目見たう御座いました」と云つた時には、國恩和尚も貰ひ泣きして同寺の式臺には一青一老の二僧が、相擁して暫しは悲嘆の涙に咽んだのである。

ヤレ殘念

二代目の貧乏和尚

斯くて月窓和尚示寂せし少林寺は、一時無住と成つて、當然起き來るは後住問題である、法類信徒等は、師を後住にと薦りに推薦すれども、當時師は某大寺より、招待を受け、食指大に動きし折柄とて、首鼠兩端、決し兼ねしを恩師の國恩和尚頭を横に振り、「弟子として師匠の後目を繼ぐ、これ程の名譽が何處にある寺の貧富寺格の高下抔は、坊主に用なき俗事である」と、頑として聽き入れぬより、師の決心も便りを得て、遂に月窓の跡目を相續し、爰に二代目の貧乏和尚とは成つた、時に師甫めて二十二歳の若僧！

恩師の一喝

勸當解除

這の狸坊 上

貧乏和尚貧乏寺の住持と成つて、生前の勸當は、國恩和尚本師に代つて其解除を命ぜしかば、今は誰れ憚る者もなき、靑天白日の身と成つた惠潭和尚、意氣益

々軒昂して、そんじよそこらの古老も畏敬す、と云ふ有様に、高い鼻は彌々益々高く成つた、がその高い鼻はポキリと折られる時節が來た。

師少林寺に住して間もなき頃、醫者たる千葉家の愛嬢が、不圖した病より不歸の客と成つた、千葉の主人は禪門諸家の鉗鎚を受け、禪の造詣甚だ深く、元來が眞宗信徒なれども、愁ひに生臭坊主に引導を請ふよりは、近頃僧堂返へりの少林寺新命和尚は評判宜しきを以て、導師は此の和尚に賴まうと、その葬式は、少林寺へと持ち込んだ、惠潭和尚益々鼻孔遼天、乃公も曾ては僧堂に入て修行せる者、在家の葬式何かあらむと、往いて引導を授け、一喝を吐き、拂子を左右に揮つて、大威張りでその日の導師を勤めた、そして墓場より直ぐ戻つて施主の千葉家へ歸れば、善盡し美盡せる見事なる膳部が出て、其日の脇導師は言はずもがな、僧俗數多竝み居る中へ、現れ出でたるは主人の千葉居士。其片手には卷き繪の大盆に謝物を上せて、恭しく師の前に跪き、今日の導師の勞を謝した上、「時に御導師」

とキツと開き直り、偖て尋問しけるは、

私御伺ひ致しますのは外でも御座らぬ、今日御吐きになりました一喝は、臨濟四喝の内何喝に候哉、……成程然れば娘は其一喝で、何處に何う成佛して居りますす歟、此義確かと承りたい。

とツメ寄つた居士の威儀は、嚴として大磐石の如く、その音聲は凛として迅雷の如く、師の顏を差し覗く眼光は閃々として電光も啻ならずであつた、是に於て乎流石の少林新命和尚も、グツと詰つて一句も出ず、唯目を白黑して居士の顏を見つむるのみ。

主人の居士は「サア御返答は如何に」と、疊を叩き膝を乘り出して詰問に及んだが、惠潭和尚は依然として答へ得ず、それと見て取つた居士は、忽ち大盆を振り翳して「這の狸坊主！　能くも人を騙まし居つた、自分の安心も出來ずして、而も我が可愛い娘に引導を授けるとは何事だ、這の狸坊主め」と件の大盆を振り

上げて打つは〳〵打ちのめし、盆は碎けて粉な微塵、和尚の顏や頭は鮮血を浴びて、飛んだ活劇を演出した。

衆人稠坐の眞中で、强か打ちすゑられた惠潭和尚は、恥かしげに頭をも擡げず流るゝ血潮をも拭かず、勿論膳部の箸をも執らず、茫然自失、唯悄然たるのみであつたが、其處を千葉の主人は又聞えがしに「這の狸坊主め」を口の中で繰り返し乍ら、碎けたる盆の破片を拾ひ集め、豫て用意したる頭陀囊を取出して、その破片を收め、師の前に放り出して曰く、「狸坊主、此の盆の接げるまで修行して來い」と、嗚呼記念の囊は師が首に懸けられた、最前まで意氣揚々、今日を晴れの導師として威張り散らして居た惠潭和尚は、今はさる勇氣もあらばこそ、掛けた囊に滿腔の無念を收め、悄然として高津の自坊へと歸つた。

記念の囊

滿腔の無念

通參實に十五年

滿坐の中で千葉の主人が「這の狸坊主」と詈りし一語は、如何に師が靈的鼓膜に響いた歟、年八十を過ぎて妙心寺の管長と成りし後ちまでも、會下の雲衲を集めて當時の光景を語る時は、必ず「其時千葉の主人は、此の私を狸坊主と申しました」と妙に力ある聲にて云ひ、更に一段語調を高めて「何うです千葉が、狸坊主と申しましたぞ」と、云はれるのが例であつて、其時の樣子は常に一種異樣の光景を呈せらるゝが例であつたと云ふ、以て師が如何に無念に思ひ、又如何に發憤せられしかは解る、而して師が一生涯肌身離さず、守本尊として居られた「千山不白居士」の位碑の前身は、卽ち千葉の主人であつたのである。

師の發憤

守本尊

其後師は大誓願を立て、大勇猛心を發して、自坊より道程八里を距つる山城八幡の圓福僧堂に通參し初めた、其間實に通じて十五箇年、如何に雨の降る日も、一日として缺けたることなく、托鉢しもて行き、工夫しもて通ひ、鞠躬如として通參した結果は、遂に花咲き實結んで、他時異日、不白居士に感謝の涙を濺がし

むる時節は到來した。

百年の修行尚不可及

海山和尚

惠潭和尚が千葉居士に打たれて、遺恨遺る方なく、奮然として八幡通ひを初めた時の、同寺の師家は禪林に其人ありと聞えし近代の猛將、海山と云ふ和尚であつた、一日海山、師に謂て曰く「お前は千葉にどづかれたさうな、アノ千葉にかかつたら、それこそ百年目ぢや、お前が五十年百年修行しても、迚も追ッ付く事でない」と、又た異日南禪寺の大觀和尚に謁した、觀師語つて曰く「お前は千葉に殿ぐられたげな、アノ千葉に出會はしては、お前が七生の間骨折つても、彼れの足下へも寄り付くことでない」と、之を聞かされた師は勇氣益〻奮ひ、何に糞縱令百年かゝらうが、千生萬刧を經ようが、此の破盆接がではおくべきと、堅く決心した師は一關に遭へば、一憤を增し、一難に遭へば、一鍊を加へて、遂に見

破盆

事にも破れ盆を接いだ。

白髮の一老人

居士の懺悔談

師が後年大事了畢して一方の善知識となり、神戸は祥福寺の師家となり、大勢の雲水を接得する身と成られた時、積年の記念深き八幡に來て、一日碧巖の提唱をせられた、時に白髮の一老人あり、出で來て師の前に恭しく跪いた、見れば何ぞ知らん、嘗て自分を打擲した千葉の老人、寢た間も忘れることのなき不白居士であつた、師は一見するや、萬感倏ち胸に湧き、今と成つては佛か蛇か、何とも云ひ知れぬ無限の感慨を以て迎へられると、老人は師の前に合掌三拜し、寒暖の挨拶を終つて、次に左の懺悔談を爲した。

まあ／＼お前樣、能くもこゝまでにお成り下された、斯くあつてこそ、私も初めて白狀が出來ると申すもの、私がお前樣の頭を打擲して以來と云ふものは

夜となく晝となく、二六時中忘れた事はありませぬ、毆ぐられたお前樣は尙更のこと、その一念で只今は立派な御老大師樣、さて其白狀と申すは貴方の恩師、棟林和尙が大觀海山の二師に賴み、その二師が私をお使ひなされて、娘の死んだを好い機に、貴方の頭を打つたのであります、若し貴方があの儘修行なさらなかつたならば、此の私も地獄に往き、死んだ娘も成佛が出來ませぬのを、能くも能くも此私に白狀をさせる御身となられました。

居士の自白

と一伍一什を物語つた千葉老人、當年の猛威は何處へやら、今は涙脆き老いの身、彼れは斯く物語る內にも、萬感の熱涙は連々として雙眸に滴つた、之を聞いた昔の惠潭和尙今は祥福の老大師なる師は、「さうであつたか」と初めてその由來を知り謂はれを聞けば有難き守護の神、能くも玆までに仕て呉れたと、二人は相擁して泣かれた、是れ師が件の破盆と、千山不白居士の位牌とは、一生肌身離さず常侍供養せられた所以である。

守護の神

工事實に十四年

以上は是れ師が千葉の一喝に遭うて、祥福寺の老師にまでなられた概略であるが、此外に沒すべからざる一二の逸事がある、師は當初八幡通ひを初むるや、間もなく少林寺の庭先きに、一つの井戸掘りを初められた、此井戸掘りは師が自己の根氣を試す試金石として初めたもので、最初の內は先づ石集めに著手し、八幡へ往く時は途中で頃合ひの石を見て置き、歸へりには一二個宛持て戻り、遂には、それをば門前に山と積まれた、他の人之を見て、和尙何事を作すならんと、荐りに謎を解けども解けず、兎角する內その石は、一ッ減り二ッ減りして遂には無くなつて仕舞つた頃、庭先きには深さ數十尺もある見事なる井戸が出出上つた、而して此の工事實に十四年、今でも此井戸は苔むす少林寺の庭に、昔しを誇り顏に在る。

工事實に十四年

入室は後住に聽て吳れ

嘗て谷町(大阪)大仙寺に大會があり、寺主閑和尙を請して導師とせられた、此大會は三七二十一日の大法會であつて、遠邇の諸尊宿は申すに及ばず、雲衲百數十員相集つて、いと盛大に營まれた、師も勿論此大會に列り、會中師の役柄は看門とて、風呂炊き、雪隱掃除と云ふ禪堂諸役の內では、最もゲスな役柄である處が開講の日陽閑和尙講座に登つて大衆に謂つて曰く、「衲は海山から後住を貰つてのう、衲も大分年を老つて氣力消耗ぢやから、講座位ゐは行るが、入室は後住に聽いて吳れ、其後住は夫れ其處に木魚を叩いて居る看門寮の潭ソよ」と、大衆之れを聞いて啞然茫然、滿坐その意外に驚いて、衆眸悉く潭ソの顏に集つた、蓋し師は人の知らぬ間に、疾くに修行を仕上げ、同じく黑衣の一雲衲として常鱗凡介に伍して居たのである。

看門の潭ソ

無言誡に功あり

又師は陽に人の罪を責めず、「無言誡に功あり」を實地に行つて、言はずして對者をして自然の內に悟らすと云ふ風であつたのである、故にその部下の才を保護し、其咎を禦ぎてその能を發揮せしめた、彼の前田誠節等が師の代に在りて能くその過を匿くして其能を發揮したのも、これが爲である。

師妙心管長の職に在り、本山役員等の來つて重要書類に捺印を請ふ場合若しも自分の竟見に充たないものがある時は、幾度も〳〵朗讀をさせられた、而して師は儼然として謹聽し、決して可否を言はれなかつた、斯くして朗讀數回に及べば、朗讀者必ず手戰き聲震ふが例であつたが、前田誠節は流石に豪らかつた、朗讀の請求に遭へば、文面上不備の點あり、訂正して來ますと云つて引き退るのである、で他の役員も漸次その手心を覺え「わしは年がよつて合點がし難いから、

管長時代

朗讀の請求

無言誡に功あり

御坊もう一度讀んで聞かして呉れ」と云ふ語を聞く時は、直に管長の否認と斷定したさうである。

卽ち五住妙心匡道和尙と云ふは、是の如き人であつた、尙ほ此外にもためになる逸話があるが、長くなるから一先づ擱筆する。

こゝろ

一、心に由りて地獄の身ともなり、心に由りて餓鬼の身ともなり、心に由りて畜生の身ともなり、心に由りて天の身とも人の身ともなる、故に能く心を降伏する者は最も力多き人となす、我れ心と鬪うてより其年代無數也、今佛となり、あらゆる世界に獨尊の身となることを得たるは、心と鬪ひたる力に由る（五句章句經）

一、又古歌に曰く

心からこそ鬼にも蛇にも
成るぞ神にも佛にも

黑衣の使者

（第一回長州征伐の眞相）

（一）緒言

維新の際京都妙心寺に、一人の傑僧が有つた。名は鼎州和尙と云ふ、此の和尙は第一回長州征伐の時、大切なる役目を勤めて、天晴れ日本僧侶の特色を發揮した。卽ち長州征伐に就ての花形役者であるが、その割合に世間に知られてゐないのは一恨事である。先づ世間に比較的知られて居らぬと云ふ證據を上ぐれば法學博士有賀雄長氏の「大日本歷史」にしてもその長州征伐の眞相を叙述する條に左の如くある。

元治元年八月、幕府朝旨ヲ奉ジ尾張侯德川慶勝ヲ總督トシ、越前侯松平茂昭ヲ

副總督トシ、薩摩肥後筑前等二十一藩ノ兵ヲ率キテ長州ヲ征討セシム、十一月慶勝以下廣島ニ至リ、令ヲ諸軍ニ傳ヘテ開戰ノ時期ヲ定ム、是ヨリ先薩藩ノ士西郷吉之助、京都ノ留守居吉井友實ヲ伴ヒテ周防ニ至リ、長藩ノ國老吉川監物ニ會シ、諭ス所アリキ、監物其説ヲ容レ慶親父子ニ説キ、遂ニ使ヲ總督ノ軍門ニ遣シテ降ヲ請ヒ、福原、國司、益田等ニ死ヲ命ジ其首級ヲ呈シテ恭順の意ヲ表シタリ（同書、下卷八百六十九頁）

歴史上の誤謬

とあるは誤謬も亦甚だしきものである、有賀氏の説に依ると、長州三家老の首を斬らして、甘まく當時の時局を收拾した者は恰も西郷吉之助（隆盛）であるかのやうに書いてあるが、嘘の皮である、全く此の役目を勤めた人は妙心寺の鼎州和尚である、是の如く堂々たる大日本の歴史を書く同氏ですら、此始末であるから世間の人の比較的知らないのは、無理からぬ話だ。

それから又余は早稲田大學出版の「近世史維新の卷」を見たが同書には鼎州機外

抹殺
曲筆

兩師の事蹟が出て居たけれども、餘り重要ならざる事柄で而も長たらしく書き下してあるに拘はらず肝腎の事は僅に數行でお茶を濁してあるのみ、お剩けに龍華院が龍藏院と誤つて居る。是れだから予は日本の歴史は氣に喰はぬと云ひ度くなる、實際に於て日本の歴史——少くとも今日迄の歴史は僧侶の事と云ふと、抹殺し曲筆して、事實の眞相を誤傳して居ることが夥しい、が、そんな小言は止しにして、予が近日手に入れた材料に依つて取調ぶる時は、能く長州征伐の眞相を明かにすることを得るのみならず、當時の問罪使鼎州和尚が、如何に傑僧であつたかゞ解る、故に予は茲に「黒衣の使者」と題し、鼎州和尚を中心にして當時の狀況を書いて見ようと思ふ、が併し前以て斷つておかなければならぬ事は、予は專門の歴史家でないから、或は史實に多少の誤謬があるやも、計り難けれど、其處は專門家でないと云ふ廉を以て、偏に讀者諸氏の寛容を仰ぐ次第である。但し予の材料と云ふのは、鼎州和尚及び副使であつた機外和尚等の、當時の狀況を生前

黒衣の使者

に書き殘されたもので、卽ち長州征伐の眞相を知る根本材料である。此の根本材料や妙心寺の調書（二師に關する）其他妙心寺に傳はる口碑等に據る時は益々鼎州和尙に感心せざるを得ぬ、第一會心に堪へぬのは、師の談判振りの如何にもキビキビして氣持ちの宜いこと、流石に禪坊主なりと首肯かるゝ一事である。

（二）長州征伐の原因

偖て長州征伐の原因から說き起すが長州征伐に二回あつて第一回の長州征伐の原因と云ふのは、長藩が三條公等の七卿を奉じて本國に歸つた後ち、同藩の三家老益田右衞門介、國司信濃、福原越後の三氏が參謀と成つて、元治元年（文久四年）の七月に、君側の奸を除くと稱し、禁闕に向つて發砲した、それが直接の原因なのである。彼等は全く君側の奸を除く意味で、別に他意は無かつたにした處が、禁闕に向つて發砲したのは、取りも直さず錦の御旗に對して、弓を引いたのと同一

の論になり、毫末も許すことは出來ぬのである、卽ちこれを動機論の上から論ずれば、彼等の發砲も或は咎む可きでなかつたかも知れないが、結果論の上からは斷じて容赦することが出來なかつた、であるから長藩が越格の謝罪をして罪を軍門に請へば知らぬ事、左もなくば、大義名分を明にする爲には、飽くまで逆賊の名を蒙れる長州を膺懲せねばならなかつた、仍て幕府は勅命を請うて愈々長州追討と一決し、尾州前大納言德川慶勝公を追討總督となし、公は三十五諸侯の兵を率ゐて防長兩國を征伐すべく、大阪表より發向せられると云ふ一段に成つたのである。

併し乍ら斯く追討軍を起したものゝ能く考へて見れば、此役は何も戰爭が目的ではない、卽ち大義名分を明にするのが目的で、大義名分さへ明にすれば、戰爭は仕ないで濟む、戰爭を仕ないで濟む事柄を、數多の犧牲を拂ひ、夥多の費用を費して戰爭をする位、馬鹿げた事はないが、併し長藩が面縛伏罪して大義名分を

尾侯の意見

巷間の俗説

明かにしないからこそ、大業に追討軍を起したものゝ、若し何人か有つて、長藩に名分の立つ謝罪をさすれば、悲絶惨絶の戰禍は免れるのである、で尾州侯は斯く幕命を奉じて、長州追討に赴くとは云へ、樽俎折衝の上で、事の落着するものならば、それで濟ましたいと云ふ念慮があつたらしい。勿論此説は表面に現はれた多數の意見でなくして、少くとも公の心中に潛める公一個の意見、或は公の帷幄に參せる二三策士連の意見であつたらしく思はれる。

又之れは巷間に傳はる俗説であるが、當時彼我の形勢を對比して見ると、一方は三十五侯(二説には二十一藩)の兵、一方は僅に防長二國と云ふから、勝敗の數は一見明白のやうに見ゆれども、實際は然らずして、長州の方遙に勢力が有つたと云ふ説もある。勿論此説は一度專門家の教へを請ふ可き説であるが、兎に角當時尾州方の形勢は、可成戰爭を避けて、談判の上で落著さする必要のあつたことは爭はれぬ事實である。

海州和尚

(三) 東福寺海州和尚の推薦

予は本稿を草する以前からして、鼎州和尚が何の因緣で此の長州事件に關係されたか、表面の事實では幾千萬の同胞を失ふ一大慘事を眼前に見乍ら袖手傍觀するに忍びぬから、仍で決死の覺悟をして、蹶然起つて事件の渦中に飛び入つたとあるが、縱しそれにしても、本件に關與するには何等かの動機何等かの因緣がなければならぬ筈だ。何の動機、何の因緣かは予の疑問であつた。妙心寺で、種々調査し、尚は當時の事情を知れる古老に就て聞き糺した結果、全く東福寺海州和尚の推薦であると云ふことを知つた。

此の海州和尚と云ふは、四十六歳の時江州永源寺に住山し後ち又京都東福寺に出世した人で、それ以前は尾州知多郡大高村長壽寺(永源寺末)の住職であつた、長壽寺は尾州藩士清水甲斐守の菩提所で、それ等の關係から尾州侯に近付き公の

非常なる歸依僧であると同時に、又一面には公の腰巾著であつたとも傳へられて居る、師は「近世禪林僧寶傳」の著者が云うて居る如く、豪邁果斷、機を知る神の如き人で、隨分豪傑肌の人であつた、仍て尾州侯は忽ち師に著眼し此人ならば必ず問罪の大役を仕遂げるであらうと思つて、師を第一の候補者に擬し、若し師が固辭せば師の眼鏡に叶つた人物を派遣しようと云ふ意見で、相談を掛けられたのである、何故公が問罪使を緇流に求めたかと云へば、維新の際は僧侶ならば御法要で御座るとさへ云へば、敵中へも自由に往來が出來たからである。

斯くて尾州侯より海州師に相談があると、師は自らは辭して――老年の爲め――自分の代りに會下(門下の事)の鼎州和尚を推薦された、此の鼎州和尚と云ふは、元と豐後佐伯町養賢寺(佐伯侯の菩提所妙心派の別格地也)の住職であつたが、安政二年故ありて同寺を退き、それより名古屋德源寺の蘇山和尚、後ちには前記の海州和尚等に就て修行し、遂には海州師の印可を受けて、江州の永源寺では數十の雲衲を世話せられ

正使
副使

し一方の宗匠である、――妙心龍泉庵の住職と成られたは、それ以後――卽ち右の事情からして鼎州和尚は海州師の推薦で、長州問罪の正使となり、副使には妙心山内龍華院の機外和尚が成られた、此機外和尚を副使にしたのは、龍華院は長州侯の菩提所であつて、師を伴ふ時は何かに付け便宜であつたからである。此の正副二使が若黨二人を召連れ、元治元年の十月初旬京都を出發、淀川より大阪灣に出で安治川にて早船一艘を買ひ切り防州の新港へ著せられた、此時機外和尚は三十六歳、鼎州和尚は師より二三歳年上であつたと云ふから三十八九歳の男盛りであつたのである。

(四) 正副兩使の大覺悟

是より先鼎州機外の兩師は京都出發に莅み、十方の諸佛諸天神に淨水を供へて祈願し、各〻その淨水をもて水盃を爲し兩師は勿論決死の覺悟で出發された、そ

大覺悟

上陸を許さず

れもその筈である、大役を承つて幸に無事成功すれば、是れ一生の榮譽、若し仕損じたならば一期の汚辱、而已ならず、身を物騷なる敵中に入れることであるから、いつ何時不慮の災厄に遭はぬとも限らぬ、が、兩師の決心は堅い、鼎州和尙が、「禍を救ふは吾輩の職分、成否は天也、是を以て仁を成す秋也」と一途に致決斷」と云うて居られるのは、蓋し僞りなき告白であらう、此の大覺悟大信念を以て臨まれた兩師、就中鼎州和尙の行動は實に快刀を以て亂麻を斷つの概があつた。

兩師が海路無事防州の新港へ著し、イザ上陸をしようとせられると、陸上には數十人の警衛を配して、關門嚴重、容易に上陸を許さぬ、從者を遣はし案内を請はると、役人船中に來つて曰く、唯今防長の兩國は謹愼中にして他國人は一人も入國を許さぬ、貴僧等如何樣の御要件あるかは知らねど、一應城下へ問ひ合はす迄は船中にてお控へを請ふと云ふことであつたが、鼎州和尙頑として承知せず、吾等は皇國の安危に關し、實に寸刻を爭ふ要件を齎らして、遙々百里の波濤を押

し切つて來港せる者、船中お控へとは慮外千萬であると、到頭初談判に勝ちを制し、人馬を仕立てさせて、岩國の城下へ著せられたは、その日（十月の中旬）の薄暮であつた、處が新港の役人より前以て通知があつたか、早や既に指定の旅館があつたから、兩師は先づその旅館に落ち付き、入浴晩餐等を濟まして一休し居られると、其處へ町奉行の栗原純平と云ふ人が尋ねて來た、栗原氏兩師に面會し先づ口を切つて曰く、

栗原『京都花園鱗祥院樣とは、御手前樣に御座候哉。』

鼎州『道中表は左に候へ共、實は豐後佐伯養賢寺の隱居鼎州にて御座候、扨て今般時日を爭ひ罷越候儀は、御主人へ直々御面會之上申述度、封内にて　承候へ者、先月より山口並に萩表へ御越しにて未だ御不在中の由、御歸之都合に依り明日早曉にても早駕籠を相願、御滯留之先迄罷越度。

と云つて互に物語つて居られる處へ、又重役二人兩師を尋ね來た、此重役の云ふ

急遽歸城

處に依ると、主人監物は先月より國内過激の徒鎮撫の爲め、山口及び萩方面へ出張中であるが、最早その事も事濟みになつて、今日は確か山口發駕の筈である、左すれば三十里の道程遲くとも明後日は、歸城致されることなり、縱令御兩師が御出で被下とも、途中の會見になつて、萬事が不都合であれば、一兩日御待ちが願ひ度い、去る代り拙者共兩名、早駕籠にて今夕出發、主人をお迎へして御兩師御來藩の旨を傳達申す、と云ふことであつたから兩師は遂に其意に任かされた。

此處で話頭は一寸岐路に入るが、國老吉川監物氏が、國内鎮撫の爲め山口及び萩方面へ出張された時、途中狼藉の徒あつて、如何なる事變の起きぬとも限らぬと云ふので、本藩の有志三百八十名からして監物氏を護衛してゐたが、彼の重役兩名が途中迄出迎へて、鼎州和尚等來藩の意を告げ急遽歸城を促した爲に三百人を打ち切り、八十人の警衛で急ぎ歸藩された、と云ふ事が鼎州和尚の筆記に見えて居る、由是觀之當時防長二國の國論が如何に沸騰し、國内騷然であつたか

活手腕

が察せられる、斯くて監物氏は鼎州和尚著藩の翌晩、深更に及んで歸城されたから、爰に鼎州和尚と吉川監物氏との會見と成つた此會見の幕が、鼎州和尚獨得の活手腕を揮はれた、最も興味ある一齣である。

(五) 吉川監物氏との會見(一)

登城

翌朝兩師は監物氏に會見すべく、登城の用意を整へて待ち構へて居られると町奉行栗原氏出で來り、主人監物は昨夜深更歸城されしが、何分混雜中で未だ準備整はず、追つて使者を以て御迎へに參る迄、暫時御猶豫をと云ふことであつたから、その旨を諒とし午餐を喫し、待つて居らるゝと、其内に使者が遣つて來た、で兩師は町奉行栗原氏の案内で登城し先づ玄關より殿中に入り大書院に通られたが、到る處の各室には藩士詰め切つて警戒し、その物々しさ一通りでない、先づ大書院に於て家老衆用人衆等と挨拶し、了て上之間に通り、監物氏に會見された、

吉川監物氏との會見

一通寒暖の挨拶があつて次に鼎州師より口を切り、

鼎州『偖て拙僧此度京都御位牌所龍華院機外と同道、御當藩へ罷り出でたるは、外の儀でも御座らぬ、御承知の通り御本藩の家老、益田等三臣が發砲の一件より不日尾州侯列侯の兵を率ゐ當國追討に罷り越さるゝ次第なるが、是れ國家の由由しき一大事、吾等僧侶の身分として、國内の騒亂、衆庶の迷惑、聞き捨てなり難きに付き、今回御見舞を兼ねて態々來藩したるが、此の逼迫せる時局に對し、貴國は如何なる御處置を遊ばさるゝ思召なるや、御賢慮御腹藏なく拝承致度し。』

監物『御親切痛み入り候、就ては一應御話申上ぐるが、彼の七月の一舉（發砲事件）も毛利父子は、少しも存ぜず、彼等主人の命を撓めて恣に上京致し、その事後にて承知せしを以て、若し粗漏の事有つては是れ一大事と早速取押への爲め、家臣を遣はせしに恰も浪華著の頃、京師の一舉起り、既に跡の祭りと聞き、

驚いて引つ返したるやうの始末、誠に慚愧恐懼何共申譯無之、依之三暴臣は勿論、過激派の重立ちたる者は、悉く召捕り、唯今三臣は分藩に一名宛預け、毎日一人に四十人の衞士を附して警戒せしめ、而して一方、天幕に對しては歎願書を隣藩藝州侯の手を經て已に二度まで差出したるが、二度共御採用なく、然れども推して哀願すべしと命じ、再三使者を藝州に遣はしたるが、唯今にては藝藩とも不通の姿になり、此上は如何共詮術なく、現況御賢察ありたし。』

鼎州『承れば御尤の御説なれども、恐れ乍ら、未だ至理の盡されざるやう愚考す何者、御説に依れば三臣の暴擧は、元と毛利公御父子の知らざること、故に御下命に依りては、何時にても三臣を差出すべきに付、勝手に御處刑被下れと云ふ仕儀に取られ、是れがお互ひ國内の事なれば、或はそれにても解決されんが、公儀に對し奉りては然るべからず、而して又一方毛利御父子におかせられても、萩の本城に引き籠り、殊勝なる御謹慎、而已ならず、下々百姓共に至る迄長髪

御謹慎とは、實に感佩の外無之次第なるが、併しこれも拙僧は甚だ贊成仕らぬ、何者如何に内輪を嚴重に御謹慎なされても、外から見れば籠城の體としか見えず、又假りに籠城して戰爭を爲し、假令全勝を得らるゝとしても、一旦蒙りし朝敵の惡名は永久雪がれませぬぞ。』

朝敵の惡名

監物『然らば御訊ね申す、唯今弊藩としては、如何の處置して宜きや、定めて御賢慮もあらん、御腹藏なく御教示ありたし。』

鼎州『愚見に依れば、是れは何うしても越格の謝罪をせねばならぬと思ふ。』

監物『謝罪は毛利父子の所存なれば、固より謝罪の考なれども、併し唯今弊國は謹慎中にて足一歩も國外に出づること叶はざれば、先づ國境へ出兵し海岸に出て謝罪する考であるが如何で御座る。』

謹慎中

鼎州『イヤ出兵の上にては遲し、御承知かは存ぜざれど、總督は當る十一月朔日大阪表御發陣、十六日藝州廣島へ御著陣、同十八日軍令下知との御議定で、形勢

已に逼迫し居れば、實に一刻の猶豫も御座らぬ。』

監物『然し藝州侯の手を經て、再度まで歎願書を差出し、及び國内一般謹慎して哀願したるにも拘はらず、尙ほ御採用なくば、唯今と成つては最早謝罪の途も無いでは御座らぬ歟。』

鼎州『恐れ乍ら申上げます、吾等緇衣の身にて是の如きことを申上ぐるは如何かと存ずれど、併し幾千萬の生靈を救ふ大事件なるが故に、玆に苦言致す次第なるが、抑々三暴臣は、畏れ多くも禁闕に向て發砲したる逆徒では御座らぬか、左すれば速かに三臣の首級を斬り取り、公儀へ御差出しに相成、又一方毛利公御父子も城中の御謹慎は却て籠城の體にも、疑はれるに付、宜しく城外の御菩提寺に退き御謹慎之れあるが至理と存ずる、故に斯くして謝罪せられ、その上御採用なくば、致方も無けれど、然かせずして何處に誠意の謝罪が有ります歟、仍て左樣御取計ひ相成らば、拙者共乍未熟身命に替へて、總督の御採用を御取

計ひ申さん。

と、鼎州和尚が此一言を呈せられた時、遉の監物氏も『御教示深く骨髄に徹し』と申され、感激數刻に及ばれたとあるが、想ふに實際ならん。

感激數刻

（六）吉川監物氏との會見（二）

三臣の首級

斯くして監物氏は、深沈數刻、考一考して、漸く口を開き、

『貴説條理貫徹、如何にも御尤の仰せなるが、毛利父子を城外の菩提寺に退かしむるは、是れ易々たる事なれども、唯今益田を始め三臣の首級を斬らば、一藩の者必ず動搖致さん、是れ弊藩の苦衷とする處、御賢察ありたし。』

『先刻御前は三暴臣を召捕り置き、幕府の御下知次第にて、此暴臣を差出す意味で、再度歎願に及びたりと仰せられたではありませぬか、偖て熟考は此處で御座る、三臣を公儀に御差出しに相成らば、嚴刑に處せられることは云ふまでもないこと、而已ならず、又如何なる辱しめを受けぬとも限らぬ、然らば御主君の命に依つて相果ると、幕吏の指圖に依りて河原乞食同樣馘首さると孰れが武士の面目に候哉、況んや三臣死せば千萬人を救ひ、千萬人を救へば是れ取りも直さず、武門の仁術と申すものでは御座らぬ歟、故に一國の大事と一藩の動搖と、孰れが重きか、輕重得失、篤と御熟考あらせられよ。』

武門の仁術

日本僧侶

此の「一國の大事と一藩の動搖とは孰れが重き歟」と云はれた師が最後の一言は、確かに長藩に對する一種の爆裂彈であつた、師が是の如く、言はんと欲する處を、忌憚なく言ひ放つて、毫も躊躇逡巡の色なきは、鼎州和尚たる者、遉に日本僧侶である、而して談判は此夜素より盡きず和尚が最後の言葉に對して、監物氏より「然らば篤と熟考しまして」と云ふ言葉で、雙方立ち別れになり、監物氏が座を引かれると、兩師は大書院に退かれた、すると藩士の若手威儀を正し、小笠原流にて見事なる膳部が運ばれ、茲に大饗應の座と成つた、で、兩師は一門の家老吉

川采女の相伴で、その饗應を受け、饗應後薄茶煎茶菓子も生干菓子の兩樣出で、充分頂戴し初更の頃旅館に退かれると、間もなく膳部菓子其他一切の殘肴は白片木に大奉書を敷いて、悉く運ばれたとあるから、隨分非常な優待であつたと見える、軍使となる難い哉ではあるが、併し亦一世の榮譽ではない歟。

（七）翌日の會見

斯くて翌朝になると、監物氏の使者山田右門と云ふ人、客舍に參候し、同人曰く、昨日は御貴臨を辱うし、しみ〴〵御敎示の段誠に辱けなく、主人監物より可然挨拶に參れとの事故、唯今參候したる次第、就ては主人監物儀は從來頭痛が持病の處、この兩三日睡眠不足の爲めか、昨夕より熱發し今朝臥辱中なるが、昨日御話の續きも有之に付病間を見計ひ御會見致し度と申され、尙ほ失禮恐縮の至りではあるが、病中の事故居間の方にて、御目に掛り度いと申さるが、御都合如

何で御座る。御差支なくば後刻使者を以て、御迎へに出ますと云ふことであつたから、鼎州和尙は『御念入りの御挨拶重々恐懼に堪へず』と挨拶して置いて、其日の午後三時頃重役兩名に迎へられて、兩師は從者を召し連れ、前日の如く、登城された、矢張間毎の警戒は毫も前日に異らず、先づ大書院に通り例の如く家老衆に挨拶、了て小書院上之間に入り、此處に於て第二回監物氏との會見と成つた、今度は監物氏より口を開き、

『今朝使者を以て、申上げる通り昨日御面會後、持病差し起り、遂に先刻迄蓐中に在りしが、幸ひ少しく快方に向ひし故、此處まで罷り出で御目に掛る次第、併し病中何かと失禮の段不悪御諒察を。』

と挨拶して、次に前日の談判に引き續き、監物氏より左の返事が有つた。

監物『扨て昨日はしみ〴〵と御敎示に預り、誠に難有く存じ候、夫れに付昨夜來種種に熟考評定せし結果、これ迄歎願書の趣旨御取り上げ之れなきも御尤至極

と初て合點がゆき、是れと申すも元と〳〵毛利大膳父子、不取締より差起りたる事なれば、何とも恐縮の至りに堪へず、就ては三暴臣の首級を差出し、同時にお示しの如く大膳父子城外の菩提寺に退きて謹慎し、罪を幕下に待ち奉るに一決せしが、歎願書は貴僧等御持參被下や否。』

鼎州『左樣御議定相成らば、此上の御處置はあらず、不肖乍未熟一命に代へても御取計申さん、然れど歎願書は從前の如く、藝州侯の手を經て御差出しに相成る方宜しかるべし。』

監物『是れまでにも、吳れ〴〵申上げたる通り、藝州侯とは唯今封域の應接は勿論、縱令歎願書たりとも、今日限りお斷りとまで仰せられたる昨今、此際御依賴する面目なく、特に不日總督御追討御發向とあれば、尙更ら間に合ひ不申、間に合はねば所謂城下の盟と相成、武門の恥辱之れに過ぎず、故に深く御賢察有つて、何處までも貴僧等に御持參を願ひたし。』

鼎州『仰せ御尤もなれども、此度びの事件は國家の一大事にて、未熟なる某輩の願うて、相叶ふ處に非らず、故に飽くまで藝州侯に御懇願あるが順序と存ずる、若し又期日に間に合はずとならば、茲に願書二通を認め、一通は藝州侯に、一通は某等持參して急遽大阪表に罷出で、總督府に出頭哀願致すべく、左すれば同侯よりの願書少しく延著するとも、城下の盟とは相成るまじ。』

と鼎州和尙より右の提案を出されたが爲に、談判はそれと決定した、而して又鼎州和尙より、

鼎州『然し我等兩名歎願書を御預りして、大阪御本陣へ出頭するも、何人か證人がなければ、御採用なからん、仍て藩士の內御兩名程御附添へ被下まい歟。』

と言はれたから、監物氏は卽座に藩士目加田喜助、大草周吉の兩人を證人として、兩師に附添ふことを命ぜられたから、茲に談判は目出度終了した、而して談判終了後、種々の雜談あり、監物氏より吉川、小早川兩家の關ヶ原御陣等の話も出て、

吉川監物氏

同氏は非常に感慨を催されしとある、蓋し實際であらう、唯一口に『三家老の首を斬れ』『では斬ります』と云つて了へば、何んでもない事のやうであるが、國論沸騰、鼎の如く沸きかへり、是非の論紛々たる際、殊に祿を與へて多年鞠養した股肱の臣を『では斬つて御詫びをしませう』と一夜の裡に決定した監物氏も、決して唯人ではなかつた、鼎州和尚が監物氏を左の如く評して御座るが、想ふに過褒の讃辭ではあるまい。

爾餘吉川小早川家之兩家、關ヶ原御陣等の始末、彼是物語有之被催感激候、拙子熟〻謂毛利之家記ヲ案ズルニ、吉川廣家侯、群ヲ拔ジ國家ヲ柱ヘ、終ニハ防長ヲ被取止候中興之良相也、裔孫監物殿國家危難之時ニ當リ、防長兩國ヲ鎮撫シ、君ヲ重ジ下ヲ愍ミ、欲レ解ニ天幕之怒一、進退是愼、猥ニ無二舉動一、社稷ヲ安而祖宗之祭ヲ存セン事ヲ計ラル、實ニ非二庸常一之人、好キ一方之良相也、可レ謂廣家侯之再世歟。

武の字

(八) 鼎州師と藩士の問答

談判終了後、兩師は監物氏と離別の辭を交換して座を立たれた、監物氏は小書院の端まで見送られ、兩師は大書院に退いて、歎願書の作製される迄待つて居られると、家老衆用人衆交〻出で來りて挨拶があり、而して夜も已に深更、寒威殊の外嚴しければとて、吸物酒等が出て種々優待された、處が茲に一つ面白い話がある、此の酒席に侍したる藩士の一人が、鼎州和尚に向つて『此たび御遠路御苦勞に相成、お蔭を以て無事に談判終了せしは、偏に貴僧等御盡力の結果なるが、然し願書の趣旨相叶ふや否、御手前樣如何御思召すや』と云つて、鼎州和尚に訊ねた、師答へて『その儀は何共申されぬ、所謂成否は天にて人力の及ぶ所で御座らねば、唯今お答することは出來申さぬが、然し道理を申さば、兵は固より凶器にて武字は文字にて戈を止むと書けば、和漢共古より干戈を用ゐずして治平する

僧家の一言

退城

を上策と爲す、然らば幕府に於ても面縛伏罪して、罪を軍門に請ふ者を、無暗に御征伐はあるまじ、何にもあれ某甲等本件に干與せし以上、身命の有らん限りは身に代へて歎願申さん、僧家の一言、決して變り申さぬぞ』と云はれると、其藩士は非常に喜んで『貴僧のその御芳志ならば、弊藩の願意必ず貫徹さるゝならんが、若し幸に貴僧等の御盡力に依りて、願意貫徹せば、貴僧日本國中の何處に居らるとも、お知らせあらん事を請ふ』と云ふと、又鼎州和尚の答へが面白い、『吾等は三界を家とする僧分に候へば、到る處我家にて、行く先々の儀は、難取計御訊ねの儀は御無用に存じ候』とある、卽ち恁んな話で、互に酒盃を獻酬して居る内、時刻も鷄鳴近くと成り、漸く願書が出來たから、師はそれを受取つて退城された、退城の時も、各室には眩ゆきまでに煌々と燭を點じ、警戒の嚴重なることは毫も前日に異らなかつたとある。

而して又退席に臨み、監物氏より兩師へ、白濱縮緬二疋宛と三重の折菓子筐一

兩師の辭退

兩船競爭

組づゝとを呈せられたが、兩師は固辭して、吾等は此たび國家の爲めと存じ、身命をも擲つ決心で罷り出でたれば、折角の御思召なれ共、御芳志丈は有難く頂戴し、品物の儀は乍恐御辭退申すと云つて受けられなかつたとある。

（九） 大阪本陣へ出頭

兩師が岩國の城下へ著せられた日、及びその談判當日並に又出發の日等は、十月の中旬であつた事は解るが、確かとした日は分らぬ、けれども一行六名が無事大阪に歸著したのは十月二十八日である、一說には何分時日逼迫寸陰を爭ふことであるからとて、兩師新港を出帆せらるる時は、早船二艘を買ひ切り、三名宛分乘し、鼎州和尚が先著するか、機外和尚が延著するか、孰れにもあれ、先著の者先づ總督府に出頭すべしと約して、兩船競爭で出帆した、處が幸ひなる哉、鼎州和尚先著せしを以て、同日の夜中大阪本願寺の假本陣へ出頭されると、最早總督

大阪本陣へ出頭

田宮如雲
千賀與八郎

は明後日（十一月朔日）御發陣と云ふので、門の内外は大小名を始め其他雑兵共で、混雑せる中を押し分け、役人の案内にて應接室に通られた、すると掛りの役人田宮如雲、千賀與八郎の二人が應接に出たから、師は先づ歎願書を差出し、それより長藩謹慎及び三臣斬首の一件等を縷々陣述して、願意御採用の事を哀訴せられると、兩人は怪訝な顔付して、

一體貴僧等は法中の御身分では御座らぬか、法中の御身分で武門重大の事件に御干與なさるは何事である。

と云つて問責した、仍で師は例の鼎州式答辯をなして、

拙僧は法中の身なるが故に、本件に携はつたのである、御兩所能く御考へ下されば、僅に三臣の首を斬らば、無數の人命を救助す、是れ倏ち國家の大慶では御座らぬか、凡そ衆生濟度と云ふ濟度は多けれど、一時に幾千萬の生靈を救助する濟度は、世界廣しと雖も恐くは是れあるまじ、而已ならず、唯今長州の現狀

衆生濟度

歎願書

御發陣

は、隣藩に藝州侯あり、他に舊好の列侯ありて種々列侯に御依頼になつても、列侯皆御採り上げが無いと云ふ、所謂十方絶信の國柄で御座る、左れば御武家の手で及ばざる所を、僧家の手で救ふに何の不可思議が御座らうぞ。

と言はれるから、兩人は遂に理に負けて「然らば執政中へ御披露に及びませう」と云つて、件の歎願書を持ち、奥に入つた、間もなく再び出で來りて「願書は御採用にならぬ」と云ふことで、兩者の間に數番の押問答があり、結局兩人より、

何分各藩の士卒は、既に大半出發して居り、又御總督も明後日當地御發向にて、唯今混雑中であれば、願書は迚も御落掌に成り難く、殊に夜も已ご深更に及べば、一先づ御引取を請ふ。

と云つて、兎角師を追ひ還さうと云ふ氣分が見えたから、師は少しく顔色を變じて、

明後日御發陣の事は、拙僧も豫て承知の事であるから然ればこそ此夜中にも推

大阪本陣へ出頭

鼎州師の見幕

して參候したのである、御兩所は混雜中〳〵と仰せられるが、その混雜と申すも――師、願書を指し――是れが爲の混雜では御座らぬか、若し御兩所の如く仰せらるならば、拙僧は夜が明けようが、身を寸斷にされようが、此室は一歩も退きませぬぞ、御兩所何を仰せらる。

と云ふ見幕、此の理路當然の言ひ分には兩人も遂に閉口して、

然らば明日迄此の願書を預り、尙ほ一應公役へも評定に及ぶことであるから、一先づ引き取り明日は正午時を期して御出頭が願ひたい。

と云ふことであつた、兎角する內機外和尙も遲れて出頭されたが、最早應接濟みの時であつたから、兩師は打ち連れて退出し、その夜は船に歸つて泊された。

翌くれば十月二十九日、前夜の約束の如く、正午時に出頭し、例の應接室に通り、先きの兩人に面接して、鼎州和尙より「昨夜御預りを願ひし願書、如何御取計ひ下されしや」と問はれると、田宮氏、

國家の大慶

絕後再生の思

田宮『其儀に付昨夜來、再三再四熟考評定を重ねたる結果、此たび長州出格の謝罪にて一々尤もに相聞えたれば、總督には御落掌になりました、但し一言申添へて置く事は、藝州侯より來る歎願書と、幸に符合すれば好し、左なくば或は臨機の處置を採るも知れず、其段は豫め御承知ありたし。』

鼎州『然らば御一同御得心にて御落掌に相成しや。』

田宮『勿論御總督を始め奉り、御老中、監察使衆、孰れも御打合の上の御落掌で御座る。』

鼎州『恐れ乍ら申上げます、斯く御採用下さるれば、是れ啻に防長のみならず、實に國家の大慶と存じ、これで拙僧も大安心しました。』

と挨拶して本陣を引き上げ、其夜船に歸てヤレ〳〵と腰を下ろした時は、「實に絕後再生の思ひをして其夜は快然と泊した」とあるが、然もあらん、而して總督尾州侯は、各藩の士卒大半出發し居れば、兎も角發向廣島に往つて下知すべしとて、

大團圓

同所へ著陣はされたが、干戈には血塗らずして濟んだ、で征討の師は同年十二月に撤し、總督は翌年正月廣島を發して京都に歸へり、さしもに八釜しかつた長州事件も、幸に鼎州和尚等の斡旋に依りて玆に目度出大團圓を告げた。

（十）三暴臣の斬首

三太夫の處刑

是の如く長州追討軍は幸に鼎州和尚等居中調停の結果、實に一兵卒を傷けずして、無事に時局を收拾することを得たが、然し三暴臣の斬首は既定の事實であるから免れることは出來ぬ、故に此の首實檢の場所へ、兩師は立ち會はれたかと云ふに、是れには立會されなかつた、長州より隨伴せる目賀田喜助、大草周吉の兩人が、使命終了の上、「此上御苦勞乍ら、三太夫處刑の場所へ御立合ひ下され」と願つたけれども、鼎州機外の兩師協議の結果、隨從八木銀次郎を兩師代理として遣はすことに決し、兩人と共に出發せしめ、八木等は十一月六日廣島に著し、

首實檢

割腹

同十八日三臣の首級を總督府に差出し、十八日廣島の國泰寺で首實檢が有つた。

尚ほこれは予が或人に聞いた話であるが、益田、國司、福原の首を斬るに先立ち、藩より「これから汝等の首を斬るが、定めて殘念でもあらうが、是れも御國の爲め、一藩の爲めであるから、何卒か異存に思はず伏罪して呉れよ」と云つて、說き聞かすと、三名ながら、少しも惡びれたる氣色なく、「國の爲なら悅んで死ぬ」と云つて、各〻所屬の菩提寺に行き、祖先靈牌の前にて、見事に割腹したといふことだ。矢張一方の大將と成る者は何處かに圖拔けた處がある。

（十一）鼎州和尚の審問

其後鼎州和尚は、江州の永源寺に往つて雲水の參禪入室を聽き、機外和尚は自坊龍華院に歸院された、處が長州事件より恰も二ケ年を經過した頃、幕府は鼎州和尚を何ういふ猜疑の眼で視た歟、一日彥根藩に命じて三百餘人の士卒を同寺に

黒衣の使者

差向げ、師を召捕つた、最も和尚は夙に勤王の志を抱き、在伯の際勤王の志士と通じ竊に往復せられたことが、佐伯侯毛利高泰公の耳に入つて、公は師の身上を案じて脱走せしめ、後ち師は京都に來て、同志と氣脈を通じ竊に畫策せられたといふ説もあるから、或は夫れ等の嫌疑もあり、又あの時代の事であるから、幾多の誤解もあつたであらうが、兎に角氏は彦根藩に捕はれて、一時囹圄の身と成つた、是れが慶應二年五月十九日（此の月日は機外師の筆記と妙心龍泉庵の記錄と符合す）の事であつて、同二十二日京都町奉行所へ護送され、六月二十一日本山妙心寺役僧召出の上（師は當時江州永源寺に居られしが僧籍は妙心山内龍泉庵の住職なりし爲め）鼎州取調中は本寺妙心寺預けと云ふことに成た、處が昔しの裁判は何處までも悠長である、翌年の正月十六日に成つて漸く東町奉行所より呼び出しがあり、永井主水出座の上、審問があつた、此時又一つの佳話がある。

當時の裁判は所謂昔しのお白洲であるから、判官は皆諸藩の家老連中であつた、師は法服著用でッカ〳〵と出で、邊りを一瞥して、拙僧の座席は何處で御座ると

訊ねた、すると一人の役人が師の座席を指した、師は「イヤ之れは怪しからぬ、之れは下座では御座らぬ歟、苟も國君の御靈牌を御祭する出家が、其藩の家老より末席に坐ると云ふことはありますまい」と一喝された、仍で一人の裁判官が「本日貴僧は罪人として」と云ひ掛くると、「イヤ〳〵罪人と成るか、成らぬかは裁判の上でなくては判らぬ筈、若しも此のやうに御取扱ひに相成るならば、拙僧は一言も申上げませぬぞ」と云つて、頑として肯かれぬ、已むを得ぬから、遂に各家老の上席に坐らすと、「本日御招きの御用は、如何なる御用で御座る」と、師から口を開かれた、判官が「別儀でも御座らぬ、先年貴僧は出家の身であり乍ら、人の首を斬るべく斡旋されたが、一體誰れに頼まれて、斯る所業を敢てされしか」と、詰問すると、師は「何事かと思へば之れは又存外の御尋ね哉、僧侶が衆生濟度をするに人に頼まれてする馬鹿があらう歟、拙僧は日本の僧侶、御國の出家で御座るぞ、御國の爲に盡力して人の首を斬るに何の不都合があらう、三人の首を

僧侶は日本僧侶

斬らば幾百千の生命を救ふ、大なる衆生濟度では御座らぬ歟」と云つて、恬で取り合はれなかつたと云ふ話が傳つて居る、それから、種々審議の結果妙心寺預けと云ふことに成つて――勿論機外師も同様――妙心寺は龍泉本庵預け、龍泉本庵は同派の自徒弟に預け、自徒弟より確かに預つたと云ふ一札まで、這入つて居る、而して翌慶應三年の正月十三日に至り「最早御構ひなし」と云ふことになり、爰に全く放免の身と成つた、試に自徒弟よりの「預り狀」を左に示す。

奉差上一札之事

豐後佐伯養賢寺隱居鼎州儀、東御役所ヨリ御吟味中、常住（妙心寺ノ事）ニ御預ケニ相成候處、常住ヨリ本庵ニ御預ケニ相成本庵ヨリ自徒弟御渡被仰付、奉得其意候、右御預リ中缺落自滅等虛事有之候ハヾ、如何共可被　仰付候、爲後日奉差上一札仍而如件

景堂徒弟總代

丙寅六月二十一日

拜　晉　　慈性院　祖雄判

龍泉庵　　同　瑞春院　慧耕判

（十二）雜　事

一、御供養米　妙心龍泉本庵の記錄に左の記事がある。

五月三日（慶應參年）景堂派披露云、宿坊瑞松院豐後佐伯養賢寺隱居鼎州座元、今般從　尾張殿御歸依ノ廉ヲ以御扶持方十人分被下置ソロ、就テハ　源敬公御位牌エ御供養申上度、此段御許容ノ上ハ御扶持方、寄附仕度ソロ間、可然御供養被下度ソロ、尤月俸尾州屋敷ヨリ月々被相渡ソロ間、直々御受取可被下ソロ樣仕度ソロ、右願ノ趣意於徒弟難默止ソロエハ此段御伺申上ソロ、尙巨細の儀

ハ演舌ニテ申上ソロト也。

是れは鼎州和尚が、尾州侯の丙命を受けて長州に使ひし、無事使命を果したと云ふ廉で、謝勞的意味で毎月十人扶持を貰はれた、その披露の時の日記である、師は之れを頂戴するに就ても、拙僧は食ふ丈けのものはあるから、そんなものは要らないと云つて、固辭されたのを、無理に强ひられて、然らば尾州元祖源敬公の御供養でも仕て上げようと云つて、ろく〳〵御禮も云はずに貰はれたのである、而して此の十人扶持は師が在世中は月々龍泉本庵に納つた。

一、尾侯の下賜品　尚ほ右の外に師は尾州侯より文臺と硯箱の二品を頂戴された、前者は梨地模樣は珊瑚珠の南天に展金の獅子、後者も同じく梨地で表は展金の獅子、裏は銀の鷹模樣、此の二品は現に豐後養賢寺に在る、而して文臺に左の箱書あり。

我聞浮屠氏之爲レ道也、凡有レ生之類ハ無レ所レ不二濟度一焉、夫有レ生之類以レ人爲レ

大、則其所二以濟度一者、宜二急且周一、然而世之薙染家者流、徒知二蝦々蠢々可レ憐而不レ可レ殺、而於二儀兆之死生苦樂一者、恬然措二之於度外一如下不二相涉一者上、滔々皆是、我鼎州師則不レ然、居常以二皇國之安危億兆之休戚一爲レ念、蓋其意謂苟得二拔與之方法一、以濟二諸仁壽之域一、於二其身一雖レ受二究困危苦一、所レ不二敢辭一也、孟軻氏有レ云曰、堯舜之智而不レ遍於レ物急先務也、蓋擧二其大者一而小者隨不レ洩、如レ師者有レ見二於此一歟、吾　老公善二師之志一、前日賜以二傳家之器什一、今復手書以賜レ之、公之待レ師豈淺々哉、師將二西歸一臨レ別謁レ予、一言予乃錄下吾公之所二以待レ師與中師之所上以レ忠二濟度利生一以贈如レ是。

墓地龍泉菴にあり

丁卯五年

桂園　田宮篤輝

一、師の遷化　師は明治七年七月朔日京都東福寺に於て遷化された、遺骸は龍泉庵に移して同庵の境内に葬り、今現に其墓所がある、歿年は何歳であつたか確かと解らぬが、長州行きを假りに三十九歳とせば歿年は四十九歳に當る。

一、師の生家　師は尾州名古屋山田家に生れ、幼にして同市矢場町政秀寺に入り、道隱和尙に就て得度剃髮、後ちに九州の畠廣瀨淡窓の門に入り漢學を修め、弘化元年養賢寺に住し、安政二年二月同寺を隱退された。

鼎州師の性質

一、師の性質　性質は至つて嚴格にて、掃除の如き最も嚴しく、障子の骨抔も一雜巾を以て拭かしめられたと云ふことである、それから本山に會議抔有て、出席された場合にも、初めの內は決して口を開かず、衆僧意見を吐露し終つた頃、徐ろに自說を主張し、師が意見を提出されると一人として抗辯する者が無かつたと云ふ、だから天性一種の威壓力を有つてゐた人のやうである。

逸話

一、師の逸話　尙ほ恁ういふ話がある、師が養賢寺在住の際、一日肩輿を命じて登城された、師輿丁に向つて「殿も玄關から昇るなら菩提寺の乃公も玄關に著けよ」と云つて、駕籠を大玄關に橫著けにさせ、以て登城されたので、一藩の者大に驚き、爲に物議を生じたが、佐伯侯は却て師の膽略を愛せられ、それより一層

歸依せられたと云ふことだ、兎に角一種の傑物であつたことは此一事でも解る。

機外師の生國

一、龍華院機外師　は江州膳所藩宮城源治右衞門の二男に生れ九歲の時龍華院に入り、同院の曹溪師に就て得度、遷化は去る明治四十一年十二月十九日、八十歲で他界せられた。

一、兩師の從者　當時兩師に隨從して長州に往つた從者の二人は一名は八木銀治郎、一名は岩治郎と云ふ者で、此岩治郎は現今京都の某處に尙ほ存命中なりと云ふ。

（十三）結　論

應接振り

上來予が十數項に亙つて、委曲詳述したる如く、鼎州和尙は兎に角一種の奇傑である、師が人との應接振りを見ると、如何にもキビ〳〵して心持ちが宜い、譬へば熟練せる碁打ちが油斷も隙もなく、先手を取つてゆくやうな趣きがあつて、

是れを禪語で云へば、隨所に主と成ると云ふ活手腕が認められる、想ふに鼎州和尚その人が元來さういふ質の人であつたのでもあらうが、併し吾人より見れば、是れ確かに師が二十年刻苦して修行された禪修養の賜物であると信ずる、要するに人間は腹のドン底に一種の底力が無けらねば駄目だ此の底力があると、如何なる盤根錯節に遭遇しても、恰も快刀亂麻を斷つと云ふ風に、易す〳〵と切り拔けてゆく事が出來るが、それでないと、少し目上の者とか、但しは六づかしい問題に出逢ふと、忽ち對境に氣を奪はれて、勇氣沮喪して仕舞ふ、對境に氣を奪はれず、隨時隨所に主と成るが卽ち禪門修養の本領である、遮莫、是の如く師は長州征伏に就て殊勳を樹てた人であるが、その割合に世間に知られて居らぬ、是れが若し俗人であつたならば如何うであらう、最早疾くの昔しに御贈位のあるべき人であると信ずる、然るに禪家緇流の身の悲しさ師の事を知る人だに稀れとは、予は師の爲め、將た國家の爲めに惜しまざるを得ぬ。

禪修養の賜物

御贈位

善德寺祐天和尚

予は昨春野州足利町の善德寺へ布敎に往つた、其節予が同寺の本堂を見るに、關東には珍らしい建築で、而もまだ時代の新しい處から、不圖同寺の現住職柴田師に就て、「此本堂は一體何と云ふ和尚が建立されたのです」、と問うたのが端緒と成つて、同師より同寺の中興祐天和尚の逸話の數々を聞いたから、此處に聞いた有りの儘を紹介して見る、勿論その本堂は祐天和尚の建立されたものであるが、その建立に就ての和尚の遠大な計畫、慘憺たる苦辛は、實に一場の好話柄である。

燒寺を希望す

祐天和尚(字宗實尾張の產也)は、殘後僅か五六十年にしかならぬ人であるが、第一和尚に就て感嘆措く能はざるは、和尚が行脚事終つて、扨て是れより一庵の

善德寺祐天和尚

住持と成らうといふ時、「自分は一生の願心として庫裡も方丈も無い、燒寺に住職がして見たい」と云ふ希望を抱いて居られた一事である、で之れを知つた或人が「貴僧、然ういふ希望なれば、足利の善德寺こそ、堂宇悉く燒失して現今何等の建物なく、空しく燒石の纍々たるのみなれば、その寺こそ御希望ならめ、然らば某甲御周旋申さう」と云つて、遂に祐天和尚を善德寺へ世話したものである、和尚は「本望成就いでや是れより乃公が平素の懷抱を實現して見せる」とは、言はなかつたが、併し胸裡大に成竹ある和尚は、胸の中では雀躍して住職せられた、此邊は今時の僧侶が算盤を彈いて、あの寺此の寺と選擇するのとは雲泥の差である。

遠大の計畫

右の如き大望を抱いて、五尺の身體さへ容れ所なき、燒寺の善德寺に住職された祐天和尚は、先づ眞最初に何處へ著眼されたかと云ふと、寺の廣い境内に所狹きまで、杉の木を植ゑられた、で檀徒の者が「和尚さん寺の境内は山林ではありますまい」と迄云つたさうであるが、胸中深く一物を祕める和尚は檀徒の小言抔更に耳に容れず、セッセと培養された、而して驚く可し當初人の嗤笑を招いた此杉木は後年本堂再建の時、足場や床下の用材に悉く間に合うたと云ふ。之に就て思ひ起すことは一昨年予が北備後の某寺に布敎した時、その寺の老僧が鬱蒼たる一樹林を指し、村田さん、あの森林は私が三十歲の時植ゑました、本年で恰度三十五年ハヤ百本許りは電柱に伐りましたが、兎角に世の中の事は笑はれても誹られても、植ゑておかなくてはなりませぬ、最後の勝利者は植ゑておいた者です、と云はれたことを玆に想ひ併せて、予は今更ながら昔の人の氣長い計畫に感服せざるを得なかつた。祐天和尚が二十年後の計畫を見越して境内に植林されし抔は、事功を急ぐ現代人に對して恰好の龜鑑ではあるまい歟。

而して又和尚は斯くして内に植林事業を起す傍ら、外には殆ど毎日の樣に近在へ出でて托鉢をせられた、而してその托鉢が月並の托鉢でなく、和尚の肚裏には人知れぬ深計遠謀があつた。

托鉢の目的

托鉢の目的は單に人の施物を請ひ受くるのみが目的ではなく、實は近郊の村落に欅の木を探すのが唯一の目的であつた、で若しも氣に入つたころ合ひの欅があると、和尚はその持主の家へ往き、「あの欅を賣つてくれぬ歟」「イヤ賣りませぬ」「御慈悲だから賣つて呉れよ、納は足利の善德寺だが、實は斯く〳〵の譯で……イヤ何うしても讓れぬテ、それは餘りにスゲない、實はあの方位にあの木があつては、家相にも關係する……ナニ、始終災難が續くと云ふのか、然うだらう、だから是非讓つて貰ひたい」と云つた調子で、竟には寄附同樣の値段で買つて仕舞

ふと云ふ遣口であつた、それから又驚くことには、偶々その木が小さくて用材にならぬ場合には「おの木を納に寄附して呉れぬ歟」と云はれると、大抵の者は、些々たる小木であるから「宜しい寄附します」と云ふ、すると和尚は「では濟まないが暫く此儘預けておくから、納の伐りに來るまで立木のまゝ保存を賴む」と云ひ置いて、その木をば十年も十五年も打捨てゝ置く、何時の間にか、成木して用材に成る頃、前約を履んで伐木にゆくと云ふ風で、その如才のないこと、注意周到であつたことは、實に驚くばかりであつた。

夜業に繩綯ひ

斯樣にして和尚は雨つても晴れても、毎日々々托鉢に出て、時には五里七里の遠方へ行かれることも度び〳〵であつたが、假令身體綿の如く疲れて歸つても、一夜として夜業を缺かされなかつた。夜業には繩綯ひをするのが常例で、丁度其

善德寺祐天和尚

頃二人の尼僧が居り、尼僧も諸共縄綯ひをして、綯うた縄は悉く二階にほり上げ、一把と雖も、賣りもせず、消費もせずに居られたので、和尚の意中を知らない尼僧共は、何の爲に斯く大業に縄綯ひをするのか知らずにゐたと云ふ奇談もある、恁ういふ風に和尚は、極めて精力主義の人で、又同時に不言實行の人であつた。

下準備廿五年

斯くして祐天和尚は下準備を爲す事、殆んど廿五ヶ年、愈々境内の杉木も成長し、荒縄も澤山に蓄へ、其他一切の準備の整うた時、本堂再建の大事業を發表せられたのであるが、その發表し、著手してからは、和尚の勇氣一段と加はり、益益精彩を付けた。

又和尚は人足を使ふことが頗る巧みであつたのみならず、その使ひ方の頗る經濟的であつたのに驚く、彼の所々方々を托鉢して歩いて、或は寄附を請ひ、若く

は購入してあつた材木を運搬する際抔は、此木なれば人足は何人で足るといふことを、チャンと自分に目算し目算以上の人夫は決して使役せず、又爾ういふ場合には自分が先頭に立つて、大八車を輓かれたものであるが、若も坂に出會ふとか但しは車輪が泥濘の中に沒して、車體が動かないと云ふ場合には、和尚ソロ〳〵路傍に起つて大道演説を初める、近郷の者は、聞きたさ、珍らしさに、我れも我もと集ひ來る、和尚は夫等を相手に一場の法談を打し、諄々として法義の難有いことを説き聞かせて、イザ法談が濟むとなると、「皆の者氣の毒だが、一寸車を押してくれぬ歟、袖の振り合も他生の縁とやら、諸君の一臂の勞は直に善德寺の再建に一波一及する、是れも法恩の一つだ……」と云つた風に賴まれるから、聽衆は實に滿足して、車の跡押しをすると云ふ有樣であつた、或は又大道演説の出來ない場合には、和尚一厘錢を珠數の如く紐に通して首に掛けて居り、部落の兒童を狩り集めて、車を押させる、押した者には件の一厘錢を呉れてやると云ふ遣り

口であつたのであるから、子供等は大喜びで押す、而已ならず後ちには錢の欲しさに、我れも〳〵と和尚の跡を追うてゾロ〳〵と慕ひ歩いたと云ふことである。

又冬季越中邊から足利へ出稼ぎに來る者があると、爾ういふ者は誰彼の容赦なく悉く寺の長屋に住まさせ勿論その内には左官も居れば、大工も石工も居ると云ふ有樣であるが、夫等の出稼人をば最も低廉なる勞銀で使はれたものである、それが爲中には遂に足利町に永住して善德寺の檀徒に成つたものも、甚だ尠からぬのである、斯樣に和尚は最も能く經濟の實學に長じて居られた。

出稼人

緇衣の工學博士

本堂再建は實に和尚が畢生の大事業であつた、此大事業を遂行する爲に、設計も和尚自ら立て、圖面も和尚自ら作り、大工は却て和尚の指揮を仰ぎ、特に圖面を引くことの巧みであつたことは大工の棟梁も舌を捲いたと云ふことである、今

圖面引き

現にその圖面は善德寺の寶庫に遺されてあるが、何人が見るも、素人の引いた圖面とはどうしても思はれぬ、故に現住職柴田師は、和尚は實に工學博士の技倆があつたと云うて居られるが、決して過褒の言ではない、且つ又繪畫の心得も人一倍あつた人で、現に本堂や襖の扉抔に、牡丹に唐獅子の繪抔が書いてあるが、これを見ても田舍和尚の、素人繪とは如何しても受取難い、要するに和尚は多藝多才、如ふるに實力實行主義の人であつた、而して和尚が赤手空拳を揮つて、無中有を生じたる本堂は、全部總欅で、其間數實に十間四面同町の一隅に巍然として雲際に聳ゆる堂宇は、卽ちそれである。

尙ほ此外に和尚は庫裡を建築し、現今の建物中和尚の手を煩はさぬものは一つもない、卽ち善德寺は和尚を得て初めて一大美觀を呈したのである。

逸話二則

肥擔桶に衝突

爰に恁ういふ話がある、和尚が或るとき二三の人足を伴れて、例の材木を運搬に往かれたとき、運搬車が誤つて百姓の肥擔桶に衝突つて、中の人糞を悉くぶち明けて仕舞つたことがある、その時百姓は非常に怒つて、這の糞坊主と喰つてかかつた、何と云はれても誤つたは此方の疎漏であるから、和尚は言葉柔かに懇々と詫び入られたが、併し何ういふ風の吹き廻はしにか、件の百姓は一歩も譲歩せず、元の儘にして返せと云ふにぞ、此の上は最早詫び入るも益なく、元の儘にして返すより仕方がないと諦めた和尚は、法衣の袖をまくし上げて、惡臭紛々として鼻孔を剪く人糞をば、兩手の掌を以て掬ひ入れ、初め一回を掬うて、將に第二回目を掬はんとしたる時、如何に頑冥不靈の百姓も、見るに見兼ねて、遂に百姓の方より詫び出たと云ふことである、予は此逸話を聞いて、益々和尚の偉大なる人格に感せざるを得なかつた。

即ち和尚は是の如き隱忍大度の人であつたが、然らばその爲人敦厚溫籍、何

葬式の導師

法義が許さぬ

等人を高壓する識見はなかつたかと云ふに、決して然らず、爰に又一佳話あり、左に紹介しよう。

足利町在の岩井村と云ふに、現今善德寺の檀徒が二三十軒ある、その内の某家は卑吝極まる家で菩提寺の本堂再建と云ふ、特種の場合にも更に寄附せず和尚は溫容和顏殆んど拜ぶんばかりに賴まれたが、冷々淡々更に應じない所から已むなく打棄てゝ置く中、偶々その家に死亡人があつて、葬式の導師を賴みに來た、其時和尚の曰く、「折角であるが今日の導師は眞平御免を蒙る、マア能く考へても見よ、他村他檀の信者ですら本堂再建には尠からぬ喜捨をして呉れた、然るに先祖の位牌所の再建と云ふ、一世一代の時に、檀徒の者が寄附をしないと云ふことがあるか、それでは法義が許さぬ、法の手前愚衲は斷じて往かぬ」と、頑として應じない、何分當時の事であるから、然らばと云つて他寺院を賴む譯にも、亦神道に赴く譯にもまゐらず、其檀徒は困りに困つて、「然らば如何にせば御越しが願へ

ますか」と云ふと、和尚云ふも云うたり「御前の處の屋後にある杉の木全部を寄附せよ、然らば今日の導師は勤めて遣る」と、背に腹の替へられぬその檀徒は、遂に全部を寄附したが、その杉の木は何れも大木で、その數は實に三十幾本あつたと云ふ、詰まりその家は高價な葬式を行うたことに成つた。

祐天和尚とは即ち是の如き人であつた、自ら掌を以て人糞を掬つた人が、時と場合とに依つては實に一見識を以て人に臨み、毫末も讓らなかつた所、流石に麥飯腹の禪僧である、古語に「心踏二毘盧頂顙一、行拜二少女足下一」とあるが、和尚は即ち此語と如き人であつた。

後篇

禪林佳話

はしがき

禪宗には所依の經典は無いが、然し生きた經典がある、黄卷赤軸の經卷は無いが、併し活きた法門がある。活きた經典、活きた法門とは何んであるかと云へば、修行純熟の大善知識がそれである。單にお悟を開く許りが、禪の修行といふのではない、公案に賴つて知見を研き、研いた知見が遺憾なく、實地に行修されなければならぬ、換言すれば、行（行履）と解（知見）とが一致しなければならぬので、行解相應する所に、實に禪の禪たる活生命があるのである。更にも

行履卽ち法門

一度云ひ換ふれば釋尊の法門が其儘行履と成つて現はれ、行履卽法門とならなければならぬのである、であるから、善知識の一言一行は極めて大切で、又極めて尊いのである。

行藏一ならず

是の如く善知識の一言一行が法門であるとするなれば、それを書き付けた所の高僧の傳記逸事も亦是れ法門と云ひ得るのである。最も善知識の内にも、一休和尚の如き、滑稽剽輕洒脫な和尚もあれば、又大灯國師の如うな豪氣峻峻惡辣な宗匠もあり、又關山國師（無相大師）のやうな綿々密々水も漏さぬ大陰德家も有つて、各人各家其宗旨性情の如何に由つて行藏は皆一ならずであるが、併し孰れも自己修養底の露出でないものはない。

恁ういふ風であるから、禪宗僧侶は何處にか他宗僧侶と違つた所がある、從つて禪門高僧には逸事に富み逸話に富んで、その逸事逸話中には、人の頤を解くやうな奇想天外の禪話もあれば、又一語能く人の肺腑を突く警句も有つて、却々面

白くて又タメになるものが甚だ尠くない、何が出るか其處は筆の走る處に任かすとして、兎に角少許り書いて見ることゝする、勿論中には既に人耳に爛熟した話もあらうが、夫れは前以てお斷りして置く。

聖福寺仙崖和尚

筑前博多の聖福寺に、今より約七八十年以前に、仙崖和尚といふが居られた、和尚は能書家で而も亦繪畫を能くし、和歌にも堪能であつたが、或時某大家より新築の落成式に和尚を請じて、撤宴後「何か新築の祝辭を……」と、畫箋を伸べて揮毫を請うた、和尚諾して早速筆を執り、サラ〳〵ッと一句造作もなく、なぐり付けたが、その句が如何にも人を馬鹿にして居る。

ぐるりつと家を取りまく貧乏神

で、其家の主人は勿論、一座の面々互ひに顔を見合せて、「なんぼ何んでも今日の

新築祝ひに斯んな不祥の句を書く者があらう歟、和尚も餘程人を馬鹿にして居るとは一同が云ひ合はしたやうに胸中竊に囁いた不滿の聲であつた。けれども、和尚は一向平氣で、先づ煙草一服を吸ひ付け、緩る〳〵推敲した上、

家の寶は外へ出られず

と、下の句を附けられたので、主人は申すに及ばず、來客一同は手を拍つて喜び「又と恁んな結構な祝辭があらう歟」と孰れも嘆賞したといふことである。

仙崖和尚詩人を凹ます

又和尚には恁うした話もある。或時詩人某が遣つて來て、何かの話次に「詩文は鐘鼓の音を寫すに錚々鏊々の文字を以てするが、唯だ繪事は其技神に入ると雖、鐘鼓の音を寫す能はず」と云つて盛んに繪事を貶黜した、すると、和尚早速紙筆を呼び、立所に一士人の長槍を擔いで濶步せる圖を描き、詩人に示して曰く、「お前さん此音が聽こえるか」と、詩人某は何の事か譯が判らぬから、訝つて之を問へば、和尚「此繪にはテンック〳〵（天突く）」と云ふ音がしてゐると云はれたので、流石の詩人も大に恥ぢたと云ふことである。

此處らが卽ち和尚の禪機である、頓智好く出るのが必ずしも禪ではないが、併し禪の修養があると、我知らず自然に禪機が迸出する。

澤菴和尚の辭世

東京品川東海寺の開山澤菴和尚が、今や將に入寂せられんとする時、弟子共が和尚に辭世を請うた、和尚之を許さず、「納には辭世はない」と謂つて肯かれなかつたのを、弟子共が强ひて請ふ爲、遂に「夢」の一字を書して辭世に代へられた——但し澤菴の此辭世は唯は看まいぞ、此夢の一字には甚深の意味が有る。

澤菴和尚と柳生宗矩

澤菴和尚が柳生但馬守宗矩侯と、頗る道交の厚つた事は皆な人の知る處である、一日澤菴一枚の細長き板を地上に抛げ出して曰く、「足下は此上が渡れるか」と、宗矩苦笑して曰く、「これしきのものを渡るに何の造作があらう」と、ツカ〳〵と渡つて了まつた、すると澤菴は「然らば此板を此處に持つて來たならば渡れる歟」と、今度はその板を數十丈もある高い處に持つて往つて、橋の如く架けられた、宗矩遂に渡り得ず、澤菴和尚は「乃公なれば、見ん事渡つて見せる」と云ひつゝ、造作もなく渡つて了まはれた、――これは如何したものであらう、唯場所を異にして居るのみで、板は同一の板である、地上で渡れたものが、高い場處に持つて往つて渡り得ない筈がない、その渡り得ざるは、高い！　危險！　此觀念に襲はれるからである、然るに澤菴にはその觀念がない、即ち禪は萬象を空じて一に歸

一枚の板

し、その一も亦空ずるから、茲に不思議の働きが出來ると言つて置かう。

雲居禪師の道力

松島瑞巖寺の開山雲居禪師（大悲圓滿國師）は、頗る道心堅固な碩德であつた。禪師が瑞巖寺に居られる時は、毎夜御島の石窟に往つて坐禪をせられるのが、夜な夜なの勤めであつた、處が鄕中一少年あり、禪師の悟道を試みんと欲して或る夜惡戯を行つた。

その惡戯は何をしたかと云へば、禪師が坐禪を終へて今しも自坊に歸へらうとせる丑三つ頃、少年は路傍の松梢に踞つて禪師を待ち、神ならぬ禪師がそれとは露知らず、靜づ靜づと其下を通行されんとした時、少年は猿臂を伸ばして、ムヅと禪師の頭を攫んだと云ふ始末、蓋し少年の積りでは唐突けに斯くしたならば、和尚は定めで喫驚するであらう、若し吃驚仰天後ろへ踏ん反り返へるやうな和尚

惡少年

雲居禪師の道力

であつたならば到底取るに足りない凡僧であると、自身自ら相場を附ける考であつたが、攫めばとて、何等の反響もない、禪師は依然として佇立不動の姿勢で更に一語をも發せられぬ、竟には少年根負けをして手を放つと、禪師は徐ろに歩を進めて自坊へ還つて了まはれた。

其後四五日を經て少年は何に喰はぬ顏で禪師を訪づれた、此時も少年の積りでは「今日和尙に逢うたらば、定めし前夜の話が出るであらう、左すれば多少當夜の和尙の狀況が判る」と、いふ考であつたのであるが、逢うても一向何等の話も出ぬ、乃で少年の方より口を切つて、「時に和尙さん近頃何か變つたことはあまりせんでした歟」と、暗に前夜の事を仄めかしたけれども、禪師は「何事も御座らぬ」と答へられた、「イヤ四五日以前の夜半に誰かゝ惡戲を致しませなんだか」と云ふと、禪師は初めて思出したといふ調子で、

『ウンあの事か、有つた〳〵、四五日以前の夜半に衲の頭を驚攫みにする者があつたが、能く〳〵考へて居ると、攫んで居る手が段々溫くなつて來たから、こりや誰れかの惡戲である哩と思つて、相手にしなかつた。』

と云つて話されたので、之を聞いた少年は大に恥ぢ大に悔いたと云ふことである、何んでもない事のやうであるが、之れはウント定力のある人でないと、恁ういふ藝當は打てぬ。

雲居草賊を度す

又禪師に恁うした話もある。或年禪師が關東地方を旅行中、某處に於て追剝に出會はれた、七人の草賊が路を遮つて、「何卒うか草鞋錢を……」と强請する、禪師從容之に答へて「然らば少許りであるが、之を遣はす」と云つて、有金悉皆を渡されると、囊中には幸に七金有つて賊共は各々其一金宛を配分したが、貪婪饕くことを知らぬ彼等は、マダゆすれば餘金があると推量した歟、それとも事實衣

類を剝ぎ取る考へであつた歟、跡より禪師を追跡して、再び禪師に肉薄し、强欲にも禪師の衣帶を剝ぎ取らんとした、すると禪師は忽ち嚇つと怒り、

『汝等何をぬかすのだ、衲は有金悉皆を渡して遣つたにも拘はらず、マダそれで飽き足らないで衣類まで剝ぐとは餘りの强欲でない歟、イクラ坊主でも裸體では道中の出來ない世の中、それ程迄に此の弊衣が欲しくば、先づ衲の生首をやるから、之を斷り捨てゝ其上此衣帶を剝げ、サア首を斬れ〳〵。』

と、大地にドッカと居坐つて、怒氣嚇々滿面朱を濺いで賊共を睨み附けられた、斯う出られては如何に犬畜生に劣つた彼等と雖、眞逆衣帶も剝げず、首も斬れず、孤鼠々々〳〵と一人逃げ二人去りして、七人共遁竄して仕舞つたから、禪師は徐ろに起つて松島指して出立されたが、斯くして一時逃げ隱れをした所の賊共は後で熟熟と禪師を思出し、「從來大勢の人に出逢うて大勢の人を苦めたが、いまだ和尚の如き人に出會はした事がない、先刻の樣子で見ると、あの和尚は只人ではないわ

い」と思ふと、今日まで前後も辨へず、作し來つた所の暴虐非道の行ひが沁々と身に應へて、何處やらそら恐しく成つた、仍て此内の四五の者は遂に禪師に尾して松島に到り、眞情を披瀝して禪師の弟子と成り、後ち孰れも業を修して一菴の住僧と成つたいふ事である、而して此事は二三の書物にも出て居る。

念佛宗の鼻祖空也上人にも、此の雲居禪師に似通つた話がある、上人がこれも旅行中追剝に遭はれて、路金は申すに及ばず携帶品悉皆を奪はれ、矢張禪師の如く、衣帶までも剝ぎ取らうとした時、上人は暫くジッと賊共の顏を凝視して居られたが、賊の請求益〻急なるに迫んで、ハラ〳〵と落涙し、「あゝお前達も人の子であらうに、何んとして情けない者と成り果てた、衲が所持品は請ふに任せて、一切惠んで遣つたのに、それにマダ足ることを知らないで、著て居る衣類まで剝ぐとは、何んたる强欲、何んたる無慈悲者であらう、之も宿世の業因であらうが、思へば〳〵可愛想で堪まらぬ」と云ふより早く、大地に鰭伏し

て號哭されると、紫電一閃、廣大なる上人の慈光に照らされた賊等は、成程と合點がついた歟、「あゝ俺れ等の如き惡黨が、又と世にあらう歟」と、忽ち發心懺悔して之れも竟に上人の弟子と成り、一生上人に隨從して安樂なる餘生を送つたと云ふことである、先きの雲居禪師の話と異曲にして同巧であるが、併し禪師のは流石に禪宗丈けあつて何處やらキビ〳〵して居る、これに反して上人の方は何處やら優しい、宗旨氣質の互に相違して居る處、二つの話を對照して無限の興味を感ずる。

雲居禪師偈

雲居禪師は嘗て若州の高成寺に住し、何か氣に喰はぬ事が有つて、去つて攝州の勝尾山に隱れ、身を僕隷の中に混じて、勞役を執る事六七年、後ち奥州の太守伊達政宗公の知る所となり、聘せられて松島瑞巌寺の中興と成つた人であるが、

禪師が勝尾山に居られた時、賦せられた所の偈頌に有名なのがある、曰く

三毒生時雙眼暗、萬緣脫處一身安、衲僧行履各知否、破笠健鞋天地寬

人間は心の持ちやう一つで、此世界は苦世界とも樂世界とも成る、現今の青年が兎角煩悶病に囚はれるのは貪慎痴の三毒に縛せられるからの事で、萬緣を脫すれば一身安し、煩悶も糸瓜も有つたものでない。

馬祖と百丈

支那に馬祖と云ふ和尚が有つて、此和尚の下に百丈と云ふ一人俊髦の弟子が有つた——百丈は後ち「百丈清規」を著した人で本年（大正貳年）恰も一千一百年忌に相當する——馬祖大師一日弟子の百丈を伴れ、用事にと郊外に出られた、時に數十羽の野鴨が威勢よく飛んで行くのを見られたから、馬祖大師「あれは什麼ぢや」と問はれた、百丈有の儘「野鴨であります」と答へる「奈何へ行くのぢや

?」「何處へ行くのでせう」と云ふや否、馬祖大師は突然百丈和尚の鼻柱を力任せにギユッと捻られた、

百「ア痛ッタ、、、、」

馬「奈處へ往くのか知らんかい、這の馬鹿野郎め」

と、痛く一喝を喰つた其時此時、百丈は忽然大悟したとある。禪宗坊主は直ぐ是れだ、野鴨ぢや〳〵と思つて居ると、飛んでもない目に逢ふ、併し百丈は此時何う悟つた歟……。

身體に火を放けたら何うなさる?

支那の大典和尚といふは、一名鳥窠和尚というた、斯の和尚は隨分變挺な和尚で、何ういふ譯かは分らないが、毎時もかも樹上に棲居して、遂ひぞ下に降りて屋内に住居したことがない、故に此異名ある所以であるが、或時白樂天が和尚を

訪問して眞最初に問ひを發したのは、和尚の座所の甚だ危險なることであつた。

白『禪師のやうに樹上に棲居されては危險ぢやありません歟?』

鳥『どうして危險かい、衲よりもお前の方が危險ぢやない歟』

勿論和尚は樹上に在り、樂天は地上に居ての問答で、而も其和尚が衲よりもお前さんの方が更に一層危險ぢやと云はれるから白樂天は何の事か譯が判らぬ。

弟子(白樂天)位鎮三江山一何險之有……拙者は只今江山縣の縣知事を勤めて居て、是々の祿を食み、これ〳〵の土地を主宰して居ます、何が危險でせう歟。

と飽迄常識的に出た、仍で和尚更に一拶を與へて曰く、

然らば卽今お前さんの體に火を放けて焚くとしたならば、如何しなさる、危險ぢやない歟。

と云はれて、流石の白樂天グーの音も出なかつた、お互がいつ何時體の放火に遭うても、大火焰裏に遊戯三昧する穩座の地があれば、先づ以て大丈夫であるが、

身體に火を放けたら何うなさる?

左なくては行くとして危險ならざるはない。

鳥窠と白樂天の問答

又白樂天と鳥窠和尚とに就て、別に下の如き問答がある。

白『如何なるか是れ佛法の大意？』

鳥『諸惡莫作衆善奉行』

白『是の如きは三歳の童子も尚ほ能く之れを解す』

鳥『三歳の童子能く之を解すと雖も、八十の老翁も行ふことを得ず』

此の問答よりして、白樂天は如何にもと感心し、遂に深く佛法に歸依したとある。

古梁和尚と魚肉

古梁和尚が或時大勢の雲水を引連れて信徒の家へ齋に赴かれた、主人は和尚を

三歳の童子
八十の老翁

試みる考で、澤山の魚肉を調理して出した所、他の雲水は互に顔を見合はして誰れ一人箸を附けるものがない、然るに肝心の和尚許りは何に喰はぬ顔付で、ムシヤムシヤと平氣で喰ひ出したから、さあ堪らぬ、傍らの雲水は之を見兼ねて竊かに和尚の袖を引き「これは魚肉であります」と注意に及んだ、然るに和尚不相變平氣で「ウンこれが魚肉かい、お前等は何うして魚肉と云ふことを知つて居る歟」と云ひ終つて、けろりとして居られたので、一同の雲水は呆氣に取られ、主人も深く恥ぢて大にその無禮を謝したとある、和尚の「これが魚肉と云ふものかい・・・」は能く出來て居る。

天桂禪師、寒山拾得の贊

天桂禪師が寒山と拾得との畫像に贊をせられた、拾得が箒を持つて居るのを、寒山が笑うて居る圖に、

天桂禪師寒山拾得の贊

拂ふべきほこりもなきに箒持つ
　人の心ぞ塵となりける

本來空、何が故に箒を持かの意であらうか、其處は又寒山のぬからぬ處で、禪師は、

拂ふべきほこりもないと云ふ者を
　拂はん爲の箒なりけり

とやられたさうである。

大灯國師の足の引導

京都紫野大徳寺開山大灯國師は、どちらの足であつたか、一本枉らなかつた、處が五十六歳の冬、病愈〻重くして最早起つこと叶はじと自知せられた國師は、その將に入寂せんとするに臨み、枉らぬ足に向つて引導して曰く、

五十年來我汝の爲に使はれたるが、今日と云ふ今日は乃公の云ふことを聞け

と云ひ終つて、其足を眞二つにへし折り、流血淋漓、法衣を濕すも顧みず、泰然自若として結跏趺坐を組み、左の辭世を讀んで圓寂せられた、此話はその辭世と共に名高い話で、皆な人の知る處である。

截斷佛祖吹毛常磨、機輪轉處、虛空咬牙

佛印禪師と蘇東坡の商量

支那の宋代に蘇東坡と時を同うして、一人の名僧があつた、名は佛印禪師と云ふ、禪師學德一世に高く、名聲藉甚たるより東坡竊かに以爲へらく、彼れ果して名實相當せるであらう歟、兎も角禪師を試みんと、一日禪師を訪ひ、刺を通じて相見を求むるや、禪師快く引見せられた、一方は學界の大儒、一方は禪界の巨擘、二人者の對座は正に天下の一偉觀であつた。

當年覇氣稜々たる東坡は、何條禪師の前に跪いて敎を請はんやだ、彼れ先づ來意を述べて曰く、

予禪師の名を聞くこと久し、今日來訪せるは禪師と商量せんが爲めなり。

と、禪師輕く受けて、

衲と商量せんとは、イヤハヤ御苦勞至極、然らば敢て足下と商量せん。

と云ひも果てず、喝一喝して曰く、「這の一喝の重さ幾何ぞ」と。これには遉の東坡も答辯に苦しみ、爾後佛門に歸して深く禪の蘊奧を窮めたとある。

乃公の口からは佛を出した

前項のやうな事情から、東坡は遂に佛印と親み、一日東坡が佛印と共に馬に乘つて城外に遊びに出掛た時、其途中佛印は東坡にからかつて、貴公の風采は立派なものだ、丁度難有い佛樣の樣に見えると云ふや、東坡は佛印を顧て和尙の風采

も立派だよ、丁度コツトヒ牛のたれた糞に似てゐると云ふと、佛印すかさず、

貴公の口からは糞を出した。

乃公の口からは佛を出した。

と答へて、二人が哄笑したと云ふ話もある、之を見ても佛印は東坡に先手を打つて居る、こゝらが流石の大宗匠ぢや。

越溪和尙と三條實美公

近世隱山家の泰斗として、一時江湖の龍象を震慄せしめた、妙心寺越溪和尙（諱は守謙、本光軒と號す）は、氣宇磊落眼一世に高き大宗匠であつたが、此人が或時三條太政大臣實美公と某處に會せられた、席に在る某、公を和尙に紹介して曰く、「此方が太政大臣三條公で」と、和尙は之を聞いて胡座の儘、公に會釋して曰く「ハハア、貴殿が三條さんでありますか、布告の尻尾で、折々お目に掛

越溪和尙と三條實美公

つたが、ホンマの三條さんには今日が始めてだ」と云ひ終つて、哄笑一番、傍ら人なきが如しであつたと云ふ、何んでもないことであるが、只人では一寸出來ない挨拶。

毒湛禪師と某紳士

豐田毒湛禪師は現今妙心寺派の管長である、禪師が昨年四月時の內務次官床次氏が三教會合を唱へて、各宗派の管長を東都に召集せられた時、禪師は一人の侍者を連れてその召集に赴くべく、京都驛より東海線に乘込まれた、汽車中は禪師と侍者、外に一二の乘客あるのみで、初めの程は沈々默々誰れ一人語話する者も無かつたが暫くすると、禪師の隣席に居た五十格好の紳士は、俄に口を開いて禪師に向ひ、「老僧アナタは何處ですナ」と、極めて蔑んだ調子で問うた、禪師は之れに應へて「何處テ私等のやうな者は名もない者だ」とこれ又賣言葉に買言葉！

一時二人の會話はこれで杜切れて仕舞つたが、併し打見る處名もない素寒僧が侍者を連れて一等室に乘込む筈がない、さうは云へ孰れ是れ大地名藍の和尙に相違ないと思つたか、その紳士は馴れ〳〵しく近いて來て、而も突然に「老僧私は是れから越前の永平寺に往つて森田悟由と趙州の無字に就て一商量仕て來る積りだ」と、大變な事を云ひ出した、禪師は「あゝ左樣か」と一語輕く受けられた切であるが、併し紳士は頻りと趙州の無字を振廻すから、禪師も遂に堪へ兼ね「お前さん、永平寺に往つたテ森田は玄關拂ひを喰はすぞ」と云はれた、玄關拂ひ!!紳士は此語が耳障りに成つた歟「それは又何うして……」と反問する、禪師曰く「お前さんの樣に森田と一商量も二商量も仕て來ようと云ふ者が、趙州の無字とは何事だ、成程文字はテウの字に相違ないが、アレは趙州と讀まなければならぬ、然るにテウシユウ抔と云へば、早やそれで足許を見透かされて森田は遣はぬに極まつて居る」と、一本急所を突かれて俄に紳士の態度が一變したと云ふことであ

る、此の事は予が當時實地を目擊して居た侍者から直接聞いた話であるが、如何にも面白いと思つたのである。

無より有を生ずる實例

父子三人の乞食

無より有を生ずることは、今日の學理では絶對的に不可能であるが、我禪宗では無より有を生ずることが出來る、玆に恁ういふ話がある、京都三條の大橋の下に父子三人の乞食が居て、或日一人の紳士が藝妓や舞子に擁せられて不景氣とは何處の空を吹く風だ、と云つた風で如何にも得意然と通行するのを見た、すると兄なる乞食の子が之れを目睹して「私等もあゝいふ身分であつたならば、どんなに樂しからう」と云ふと、弟の乞食は「イヤ兄さんそれは間違つて居る、あの紳士は氣樂さうに見えて居ても、その實は高利貸に苦しめられて居るかも知れない、それに比較すれば吾等は天を笠とし地を家として、何に一つ氣兼ねのない身分ぢ

一休と蜷川

や」と云ふと、父なる乞食が「そんな結構な者に仕て遣つたは誰れのお蔭ぢやと思ふ、親の恩を忘れるな」と云うたさうである。

之を吾が禪宗の見地から見ると如何にも面白い、所謂無より有を生じたもので、天地無一物の乞食でも心の持ちやう一つで、百萬長者にも成れる、彼の蜷川新左衞門が、或日一休和尚を訪ふ、和尚蜷川を丈室に引見して茶を點じて出したが、生憎茶菓子が無いと來た、兼ねて頓智の好い一休は當意卽妙に一首の歌を讀んで之を諷した。

本來空の妙味

何をかなまゐらせたくは思へども
達磨宗には一物もなし

蜷川もさるもの、早速返歌して、

一物もなきを賜はる心こそ
本來空の妙味なりけり

一茶

虛竹禪師

と、難有く一休の思召を頂戴したと云ふことだ、此歌を前の話と照應して讀んで見ると、茲にも亦無量の妙趣を感ずる。又俳人一茶が百萬石の加賀侯より召抱へられんとした時、一茶は、

なんのその百萬石も草の露

と咏じて同侯の招聘に應じなかつたと云ふ話は名高い話であるが、これを見ても加賀侯よりも、一茶の方が遙かに大大名であることが分るであらう。

虛無僧

▲投機の偈　尺八を吹く人は世間に澤山あるが、眞に尺八の妙趣を會得して吹く人は稀れである、尺八寸の一管の笛は、單に人の心を慰む翫弄品の笛ではない、あの尺八の裡には實に甚深の禪理が寓せられて居る、尺八の元祖は紀州由良の興國寺（妙心寺派）法燈國師の弟子虛竹禪師、その人であるが、古事來歷の事は姑

天地獨歩の境涯

く措くとして、尺八を吹く人の爲に、尺八の極意を語つて見る、尺八には投機の偈と云ふがある、これは虛無僧の經文とまでせられてある偈頌で、實に大切なる二十八文字である、曰く、

一從レ截二斷兩頭一後、尺八寸中古今通、吹起無上那一曲、三千里外絕二知音一

尺八の極意は此一絕の中に含蓄されて居る。此偈頌は解つたやうであつても、その奧祕に徹底することは容易でない、が今茲に蛇足を附けて見ると、笛は僅に尺八寸の管であるが、これに唇を觸れて一曲又一曲と吹き起す時は、心中の雜念、何時しか雲と散り烟と消えて、我もなく人もなく、笛の音もなく、況んや戀ひ、富み、煩悶、名譽利達の念のあらう筈がない、三千里外何物も無くなつて、唯だ天地間に一の微妙なる笛聲あるのみ、此に至つては惡魔も覗ふこと能はず、神佛も護ること能はず、天地獨歩の境涯で、此境涯に體達しない以上、眞に尺八の極意を會得したとは云へないのである、卽ち虛竹禪師は此尺八に依りて世尊傳來の

的々相承の禪理を諸人に周知せしめん爲、又一つには尺八に依つて人の荒らき氣性を軟らげ、汚穢なる心情を洗ひ去る爲に、自ら虛無僧と成つて天下を周遊せられたのである。

微妙の笛聲

▲尺八の威力　今茲に一軒の家が有つて夫婦喧嘩を始め、主人は割木を振り上げて汝畜生！　と怒鳴り、家内は何糞！　と摺小木を持つて喧嘩をして居る眞只中へ、飄然一人の虛無僧が天地も蕩ろけよと、嘲嘲たる尺八を吹奏して來たならば、如何うである歟、微妙の笛聲が耳朶に觸れねば知らず、觸れて心の奥の琴線に響いたならば、鬼の如き夫婦も、我知らず魅せられて、一種の靈氣に觸れたかの如く、振り上げた手も何時しか垂れ下つて、心中何物をかを悟るが如き思ひがあるであらう、卽ち虛無僧が人の門に立つて尺八を吹くのは、元と一切衆生を敎化する大慈悲心より出たものであるが、近頃の虛無僧に此心あるや否やは、予の知る所でない。

法律上の不論罪

▲尺八に就ての問答　又尺八に就て一の問答がある、或る人が虛無僧を詰つて曰く、「歌舞音曲は佛世尊の禁じ給ふ所、然るに佛戒を受け祖敎を奉ずる者、而も尺八を吹くは是れ犯戒ならん」と、是れに對する答辯が實に痛快である、曰く、「有心なれば是れ罪過、無心なれば是れ解脫、吾一念僅に起れば卽ち覺して箇の尺八を取り、吹いて無心の用地に還へるなり、故に吾れ尺八を以て羯磨と爲す、什麼の罪をか說かん」と、卽ち無心なる者は所謂法律上の不論罪で、これに罪過を課することは出來ないのである。

朝寢坊の寄附

河島昭隱老師は現今大德寺專門道場の師家である、予嘗て同老師を知友西川氏と共に訪問し、種々の禪話を拜聽した砌り、西川氏老師に向つて、「私は短氣で困りますが、何か短氣を癒す藥はありませんか」と問ひし時、老師徐ろに口を開

き、――さうか短氣か、短氣では困る、一體短氣は我儘から起るのぢや、先達て私の所へ或る婆さんが遣つて來て、衲に云ふには「家の息子は何に一つ惡いことはありませんが、唯つた一つ惡いことには朝寢坊なのに困ります、妾がなんぼ八釜しく云うても聞き入れませんから、老師さんから何とか云うて戴きたいと云ふのぢやない歟、仍て衲は諾し〳〵と受合つて、或る日寄附帳を持つて、其家へ出向き、早速息子に出會つて「オイ濟まないが、朝寢を三十分寄附して呉れない歟」と云ふと、息子は驚いて、「老師何處でお聞きでした」と云ふから、何處でも聞かぬ、近所の評判ぢや、サア何んでも宜い、朝寢三十分と書け、と云ふと息子はシブシブ乍ら、書いた、善し印形を捺せと迫まつて厭やがるのを無理に捺させたが、後で聞けば爾後朝寢坊は熄んだと云ふことぢや、玆に面白い話がある、或處に一人の坊さんが居つたが、その坊さんは木强朴訥の漢で、頓と說敎が出來ない、坊主で說敎が出來ないでは困るから、是非稽古をせよと、法類や隣刹の和尙が頻りと

朝寢三十分の寄附

面白い話

勸めるが、少しもしない、けれども法類の勸告は隨分嚴しい、仍て其和尙說敎を始めたが、その說敎は口でも舌でも饒舌らぬ、朝は五時に起きて村中を鈴を振つて廻り、夜は十時に同じく鈴を振つて廻る、早朝鈴を振つて廻つたら、それを合圖に起き、夜分は又その鈴を聞いて寢よ、但し鈴を振り歩く迄は夜業を廢するナ、と云ふのである、斯くして巡廻する內には夫婦喧嘩を仕て居る家、每時も酒を飲んで居る家、朝寢をして居る家、種々樣々の事を見付ける、見付けると直ぐ例の寄附帳を出して、朝寢の寄附、夫婦喧嘩の寄附を申込むと云ふ風に、十年繼續した、所が十年間に村內の氣風が一變したと云ふ事だ、――お前さんが、短氣で困るなら、私に短氣を寄附して呉れるのぢや、短氣を癒す藥は寄附より無い、ハハハ。

夫婦喧嘩の寄附

一休和尙逸話

一休の眞骨頂

禪機

一休和尚と、唯だ一口に言つて仕舞へば、誰の頭にもウンあの滑稽剽輕、箸でも棒でも始末にをへない頓狂僧かと、一も二もなく皆それにして仕舞ふが、然う見ては一休の眞骨頂は覗はれない、一休は確かりと修行の出來上つた曠世の大宗匠である。

けれども元來が滑稽趣味に富んだ和尚であるから、從つて其逸事逸話も滑稽諧謔なのが多い、而已ならず、中には後世の僞作に羅るものも甚だ尠からぬやうであるが、縱令後人の僞作であるとしても構はぬと思ふ、何故なれば、一休の逸話には悉く禪機が含まれてゐる、その禪機が尊いのだ、滑稽も單に一時の幇間的座興に止まつては、何等の趣味も興味もないが、滑稽の裡に至理を存し、諧謔の間に大道を寓して居るものであるならば、決して棄つ可きでないと思ふ、一休和尚の逸話の如きは、皆悉くそれである。

秘密中の秘密

我に喰はれて糞と成れ

一休和尚が宗純と呼ばれてゐた、マダ小僧の時代に、其師華叟和尚が、或る晩晩酌の膳に乾鮭を上ぼして、我獨り悦に入つて甘まさうにして喫べて居られた、此れは勿論和尚の藥食ひで祕密中の祕密、小僧にも知られる筈ではなかつたのだが、どうした機にか、宗純の一休が嗅ぎ附けた。

『お師匠さん、アナタの喫べていらつしやるのは何であります。』

和尚は「失敗つたナ」と思つたが、見附られては既に雲山萬里「此れは衲が養生ぢや」と言はうと思はれたが、待て〳〵さう下手に出ると、此小僧又何の蚊の間と皮肉るであらうから、寧そ露骨にと「此れは乾鮭ぢや」と言はれた、すると小間洒落れた一休は一本鋭どく突き込んだ。

『僧侶に魚肉は是れ佛戒の禁ずる處、それをば御僧のアナタが喫べても宜しい歟、宜しければ、私にも一片頂戴がしたう御座る。』

と、和尚「困まつた奴だ哩」と思ひ乍らも、下手に此處等で溫顏を見せては將來の爲にならぬ、此處は飽迄逃げを打つに若かずと、

和尚『衲には魚肉を食つても宜い方便がある、それさへ知つて居れば構はんのぢや。』

一休『何ういふ方便であります。』

和尚『引導ぢや、引導さへ授ける力があれば宜しい。』

一休『那樣引導？』

和尚『その引導かい――汝元來枯木の如し、助けんと欲すれども生きて再び水中に遊ぶこと能はず、若かじ愚僧に食はれて成佛せんには喝ッ！……これぢや、恁ういふ引導を授ける力があれば何を喰つても構はんぢや』

と云はれたから、一休はシメタと許り早速門前に驅け出して何處で購つて來たか、一尾の尺餘もある活鯉を持ち歸つて、事も大形に鯉の味噌汁と出掛けた。

他の小僧の注進に依つて、ソレと知つた和尚は「これぞ全く衲に對する復仇！憎さも憎くき奴かな」と、床なる戒杖を小脇に挾んで勝子元に來て見ると、宗純が今しもその活鯉を筒切りにしようとする處、

和尚『宗純何を仕て居る』

一休『御覽の通りにござります』

和尚『引導はどうぢや』

一休『汝元來生木の如し、助けんとすれば逃げんとす、活きて水中に遊ばんよりは我れに食はれて糞と成れ、喝ッ！――私の引導は之れで御座ります』

と云ふや、師匠の華叟は怒氣倏ち晴れ、むゝ！、其處ぢや其處ぢや私の引導では乾鮭は成佛をしないが、お前の引導では鯉は糞と成らずして佛果を得る、出來したりな小僧、悟つたりな宗純」と雙手を擧げて讃歎されたと云ふ、詰まり和尚の言は僞善である、一休のはウブである、此ウブを賞められた和尚も亦決して瞎驢で

は無かつた。

一休の機智

又或人が一休を困まらせようと云ふ考へで、一日一休を請じ、玄關に虎の描いてある衝立を置いて、今や遲しと待つて居た、一休それとは露知らず、玄關に上つて座敷に通らんとした時、主人走り出て、「一休さん〳〵甚だ失禮ですが、此繩で此虎を縛つて戴きたい」と繩を突き出した、不意打ちを喰つた一休は少しも狼狽の氣色なく、「諾し〳〵」と其繩を受取つて「では私が縛つてやるから、お前そちらから追出せ、サア追出せ〳〵」と反對にシテ遣られて主人ギヤフンと參つたと云ふ話がある。

斯ういふ處にも一休の棒でも打てず繩でも縛れない活面目が顯はれて居る、人間は立てる間に椅子を外づされて尻餅を搗いた時と雖、自由の挨拶が出來る活作略がなければならぬ、一休の如きは正に其妙用を得た人ではあるまいか。

松の曲直を問ふ

一休和尚が或日數人の弟子を伴れて、庭園を逍遙の折、不圖池の邊の松樹の曲りくねたのが目に入つたので「誰かあの松を眞直ぐと見る者がある歟？」と問はれた、弟子共は互に顏を見合せて答ふる者も無かつたが、側に蜷川新左衛門が居て、「曲つて居ると見ました」と答へた、すると一休和尚非常に懌び、「出來した出來した然うあらねばならぬ、曲つて居るものを曲つて居ると見るが眞直である」と言はれたさうである、彼れ新左衛門も却々話せる男だ。

篩は無用なり

美濃伊深正眼寺の雪潭和尚は、雷雪潭とまで言はれた和尚で其「きかぬ氣象」は、實に人をして震慄せしめた、和尚嘗て尾州犬山町瑞泉寺の請ひに應じて、臨

何者の無禮漢ぞ

濟錄を提唱せられた時、犬山城主成瀨侯も座に列り、垂簾の裡にて聽講せられた、和尚講座に登り大喝一聲して曰く、「咄、何者の無禮漢ぞ簾裡に在つて講を聽く、雪潭が講座には粕は無い、篩は無用なり」と其聲恰も雷の如くであつたと云ふ、で一座の大衆は勿論、侯も大に驚いて俄に簾を撤して聽講されたと云ふ、今日紛紛たる僞善の徒、面諛腹嘲、表是裏非、殆ど聞くに堪へず、衲は此和尚の一語を假りて是等乾尿橛輩に飲ませて遣りたいのである。

海舟翁の座右銘

幕末の偉人勝海舟翁は、西鄕南洲と肝膽相照らし、さしもに八釜しかつた江戸城の引渡も、苦もなく二人者の間に受授されたことは皆な人の知る處であるが、流石は兵馬倥偬の間に修養を積まれた巨人、殊に禪の造詣最も深邃なりし人丈けに、其識見も一頭地を拔いてゐる、翁の座右銘に、

一、自ら處すること超然たり。
一、人を處すること靄然たり。
一、事なきには澄然たり。
一、事あるには軒然たり。
一、得意には淡然たり。
一、失意には泰然たり。

妙心寺愚堂和尚

妙心寺愚堂和尚（字は東寔、寶鑑國師の號あり）は、後水尾上皇の御歸依淺からず、道譽一世に高かりし碩德なるが、此和尚は同寺開山關山國師（無相大師）三百年大遠忌の大導師を勤めた人で、當時遠忌の偈頌に就て名高い話がある、偈に曰く、

二十四流日本禪、惜哉大半失其傳、關山幸有愚堂在、續燈聯芳三百年、

自信ある愚堂

妙心寺從來の慣例として、遠忌の偈頌は一週間以前大衆に披露して、一般の次韻を求めることに成つてゐたから、愚堂和尚も一週間以前右の偈頌を發表せられたが、誰有つて第三句の有二愚堂在一を云爲する者がない、勿論當時の妙心は妙心極盛の時代で、天下の英衲名匠雲の如く集まり、見る者聞く者、此偈頌は如何にも能く出來てゐるが、併し第三句の有二愚堂在一は少々不穩當であると、萬口同音に言ふものゝ、扨て誰一人面と向つて詰る者がない、自信ある和尚は八十の老體を提げて、數百の大衆を率ゐ、導師席に就て、音吐朗々、第三句の關山幸有二愚堂在一を臆面もなく唱へられると、衆中豫て其人ありと聞こえし越前國泰寺の大愚和尚(同寺開山)は、愚堂の言ひも果てぬ間に「此處にも居るぞ」と絶叫せられた、すると流石の愚堂和尚も、大愚への手前、愚堂在を兒孫在と訂正して唱へ直し、續いて第四句を唱へて目出度國師の大遠忌を圓成された、で妙心寺では訂正された方

活法戰

の有二兒孫在一が記せられてあるが、此和尚の大自信、大愚への謙讓、又大愚の一拶、是れ實に禪の活法戰である。

紳士の煩悶

峨山禪師某名士に教ふ

福岡縣の某名士が、或る會社を失敗して京都に出て來り、一日嵐峽の風光を賞した序で、禪師の處に來て會見を求めた、禪師は快く引見し、話次其人の年齢を問はれた、其人が「私は丑歳であります」と云ふや禪師は「ハア左樣ですか、では衲と同年ぢやが、兎角丑歳の者は失敗することが多い」と、何心なく言はれると、件の紳士は儻と心に思ひ當つたか、日頃煩悶の一伍一什を物語つた、すると禪師は徐ろに慰藉しつゝ、お前さんが此世中へ生れて來なさつた時は、素裸であつたでせう、左れば全く破產しても生れた時の儘と思へば、何も損の無い話だから兎や角と隱し立をする要なく、全財產を債權者の前に拋げ出しなさい、然う

すれば又た同情者もあり信用も増して來る」と、懇々教誨を下された、で紳士は歸來會社を整理し、禪師の教への如く全財産を提供したら、一同も其精神に感激し、「では暫く猶豫をしよう」といふことになつて、遂にその紳士は會社の頽勢を盛り返へし、後ち人に語つて、「余は峨山禪師の一席の御教誨に賴つて三百萬圓を贏ち得、お剩けに生命まで取り留めた」と言つたさうである。

生死岸頭

大死一番底

禪宗では何時でも常に生死岸頭に立てと云ふ事を云ふが、如何にも其通りであつて、何事を爲すにも死と云ふ覺悟を以てしたならば、不可能と云ふ事はない、又煩悶もない、此紳士も見事に裸一貫――卽ち死んだからこそ、大死一番底より起死回生したのである。

世人は多く幽靈

又峨山禪師一日人に語つて曰く、乃公の處へ出て來る奴には、幽靈が多い、名

依草附木の精靈

譽の幽靈、金錢の幽靈、學問の幽靈、お悟の幽靈と云つた調子で、どれもこれも幽靈であるのに呆れる、臨濟禪師も「汝等は悉く依草附木の精靈である」と言はれたが、實に左樣ぢや、名譽の幽靈からは名譽、金錢の幽靈からは金錢を奪ひ去つたならば、何が殘る、屹度魚の炎天ぼしに似たものが出來るであらう、なんにせよ自分の脚で自分に歩けない奴は皆幽靈ぢや」と、今日紛々たる僞善の徒に、此和尙の一語を藥にして飲まして遣りたい。

仁者の心動く

曹溪大師

昔支那に禪宗の第六祖曹溪大師といふがあつて、大師が法性寺と云ふ寺に往かれた時、門下生甲乙の二人が有り、門頭の幡に就て議論をおッ始めた、甲は幡動くと說き、乙は風動くと論じ、互に執つて相讓らなかつた所を六祖が言下に喝破して、「幡動くに非ず、風動くに非ず、仁者の心動く」と、で議論は一時に止んで

了つた。

誠にその通り、世界は「一切唯心造」で、一として唯心所縁でないものはない、故に「心外に法を求むる勿れ、佛を見んと欲すれば近く退いて自心を觀ぜよ」と云ふも此處の事である。

鐵眼禪師逸話

禪師の父

禪師本名は道光、鐵眼はその道號である、大正五年の今日からは丁度二百八十六年前、卽ち寛永七年の御目出度い正月の元日に呱々の聲を擧げられた、國は肥後益城郡で、父は眞宗本願寺派某寺の住職、佐伯淨信と云うた人である、であるから、禪師は眞宗の寺に人と爲り、勿論妻帶も仕て居られたが、平素無學不德の同輩が、たゞ寺格の御蔭に依つて、上位に居るのを快からず思うて居た矢先き、嘗て自分が師事してゐた、眞宗の成規院西吟が、偶々異議を唱へて破門を食つた

から、それこれの事情で禪師は遂に眞宗を脫して黃檗宗に轉じ、隱元の門に投じられた。

妻禪師を慕ふ

妻を故郷に送る

鐵眼禪師は眞宗を脫して禪宗黃檗の門に入られたので、勿論妻は故郷に置き去りである、捨てた夫はそれでも宜いが、捨てられた妻に取つては一大事である、故に遙々跡を追うて宇治の黃檗山まで尋ねて來た、妻もさるもの、尋常では對面は叶ふまいと思つて、ドッシリ腰をすゑて、黃檗山の門前に宿を取り、若しや鐵眼の門前に出た時をと、待ちに待つて居た、とある日禪師はそれとは露知らず、何心なく門を出られると豫て待ち焦がれてゐた妻は法衣の袖に縋がり付き、繰り言泣き言を竝べて、强ひて故郷に誘ひ歸らうとした、禪師獨り心にさなりと打ち笑み、共に故郷を指して出立し、遙々郷里まで往つたが、我家の門をまたぐ時、少し用が有るとて立ち別れ、其儘再び黃檗へ立戻られた、古へ宅を遷して妻を忘

ると云ふことはあるが、妻を欺まして宅を出づとは、禪師に於て始めて見る所である、が妻を欺まして宅を出たればこそ、鐵眼は日本三大事業家の一人と成つたのである。

禪師飢民を救はる

大阪の洪水

鐵眼禪師が一切藏經版行の志を起して、自ら諸方に行脚して資財を募り幾何かの喜捨を得て、將に開刻に取り掛らんとする時、偶々大阪に大洪水があつて、家屋は流され老幼は溺れ其慘狀目もあてられぬ有樣であつた、仍て禪師の大悲默視するに忍びず、多年壹錢貳錢と行脚して貰つた一生の大願たる刻藏の資金を惜氣もなく、悉く散じて市民に施行し、斯くて再び行脚して資金を集めて、幾らかを得られた頃、復た宇治に大飢饉が起り、流民道途に滿ち餓孚日に殪ると云ふ有樣であつたのである、此時も禪師は大に心を傷め、再び集めた金を以て是等の窮民を救ふこと一萬餘人、月を踰えずして餓死する者の跡を絕つたと云ふ。

宇治の飢饉

衲は嘗て禪師が山崎某へ與へて寄附を請はれた、約一丈餘もある、長い〳〵尺牘を見たことがある、此尺牘は勿論禪師の眞蹟であるが、その一節に實に左の如き文句が有つて、衲は覺えず落涙した、否何人と雖、之を見る時は落涙しない者はあるまい、因に此尺牘は目下京都貝葉書院河村氏の許に在る。

（尺牘）拙僧施行を止候へば悉餓死に及申候故、たとひ寺をうり指をきざみて施し申候共、此施行止め申間敷と存候、志の人も少々は有之候、然共、少し事にてたり不申、此中一日雨ふり候て施行やすみ候へ者大に諸人迷惑致候

鑑一文に追跡三里

禪師は刻藏の大願を思ひ立たれてより、專心專意、毎日毎日宇治の黄檗から京都の五條橋まで來て、鐵鉢を捧げて橋畔に佇み、織るが如き往來の人に淨財の喜捨を請はれた、一日扮裝いかめしき一人の武士が、いと悠揚に馬に打跨つて、五

條の橋へとさし掛つた、禪師は斯人にこそ許多の喜捨をと思ひ定めて例の如く鐵鉢を出して請はれた、件の武士は、つゆ意に介する色氣なく、振り向きだもせで、サッサと東を指して歩を進めた、禪師は鐵鉢を捧げた儘、暫くは無言で武士の後を追うて行かれたが、十丁廿丁の道を進むも件の武士はさら〳〵後見もしない、流石は思ひ定めた事は岩でも通さで止まじと云ふ、堅忍不拔の禪師は、東のはてまで行かば行け、此心通さではと、キッと覺悟をきめ、到頭三里の道もいつの間にか過ぎて、江州は大津の市へと差しかゝつた、すると武士は不圖後ろを顧み、磯と禪師を睨んで滿面怒氣を現はし、聲も荒らゝかに、這の乞食坊主奴と云ひさま、袖より鐚錢一文を取出して、禪師の顏にさゝれよと投げ付けた、禪師は押し戴き、三里の道を來たればこそ一文の喜捨をも得たれと、踴躍抃舞、再び五條の橋へ立戻られたと云ふことである。

今日黃檗版の一切藏經は、現今の價格に見積つて、ザット貳百五拾萬圓の代物

であるさうなが、此高價な代物が右の鐚一文より積り積つて出來て居るとすれば、吾人は是に於て、何物かを學ぶことがありはせぬか、千代女の句に

「千なりや蔓一筋の心より」

禪師の遷化

禪師の遷化は天和二年三月二十二日、世壽五十三歲、法臘四十一、遺骨を寶藏院の西隅に瘞む、荼毘の日、送る者十萬人、各々香華を捧げ、三拜九禮、號泣の聲城外に聞こえしといふ、禪師の遺偈に曰く、

七顚八倒、五十三年、妄談般若、罪犯彌天、優遊華藏界、踏破水中天

不老不死の大和尚

紀州西牟婁郡市ノ瀨村興禪寺は、現今臨濟宗妙心寺派の寺院であるが、此寺に今より約一百年程以前に大圭和尚と云ふが居られた、此和尚は頗る檀中受けの好

い和尚であつて、その人望は非常なものであつた、が此寺は寺格の低い爲に和尚は色衣を著けることが出來ない、で如何なる法式の場合と雖も和尚は黒衣の一點張りであつたのである、ところが元來人望のある和尚であるから、檀中の者がいづれも同情を寄せて「寺の和尚は一年三百六十五日黒衣許り著てゐるが、あれは寺格の低い爲に色衣が著けられぬのである、隣寺の和尚も色衣を著て居れば、法類の某甲和尚も色衣であるのに唯一人檀那寺の和尚許りが、黒衣であつては、和尚も氣毒であるが檀徒の者も外聞が惡いから、此處は一番吾々檀徒が各自醵金して和尚を出世させようではない歟」と云ふ相談が始まると、檀中一同忽ち贊成して立所に百兩と云ふ大金が集まつた、そこで或日其金を寺に持參して「和尚さんアナタはいつでも黒衣ばかりを著て御座るが、それではアナタも氣の毒であるのみならず、第一檀中の者も外聞が惡い、どうか此の金を以て本山に登り、出世をして切めては色衣の著られる御身分に成つて被下い」と、件の百兩の金を取出して委

細を述べ終ると、棚から牡丹餅の和尚は非常に悅んだ「これはどうも忝けない、拙僧が賴みもせぬのに、大枚百兩と云ふ大金を拵へて吳れたとは、何んたる難有いことであらう——然らば」とて、和尚は用意萬端早速支度を調へて、京都は大本山妙心寺を指して登つた。

紀州より舟行十幾日にして、京都へ著いた大圭和尚は、百兩の金子を懷中して本山妙心寺へ往くかと思ひの外、妙心寺の方角は見向きもやらず、直ちに三條通りの佛具屋へと急ぎ、百兩の金子惜氣もなく投げ出して、一大梵鐘を買ひ、淀より川船に積み込み、大阪灣に出で更に千石船に積み替へて、さッさと紀州に歸つて仕舞つた。

話變つて、一方檀中の者は、「今日と云ふ今日は和尚が出世をして歸へる日だ、普通の時とは違ふから、今度許りは檀中一同、村外れ迄出迎へに行かなくてはなるまい——オヽ然うぢや」と、豫て和尚歸山の日も時刻も、前以て決定してあつ

たから、檀徒一同その時刻に村端れまで出て、羽織袴の扮装儼めしく、今や遅しと待つて居ると、和尚は二三十人の人足に例の梵鐘を曳かせ、エイ〳〵聲で威勢よく運び込んだ、驚いたは檀中である。

檀中『和尚さん、アナタは一體どうしたんです？』

和尚『何うしたテ、何を！』

檀中『アナタは出世をする爲に本山へ登られたではありません歟、それに出世もせずに、梵鐘を買つて來るとは何ういふ譯です、これでは私共が心づくしも水の泡ぢや。』

和尚『それだからこそ、大和尚を迎へて來たのぢや。』

檀中『大和尚とは、どんな大和尚？』

檀中『梵鐘大和尚ぢや。』

檀中『梵鐘が何うして大和尚？』

と、檀中の者は少からず不滿の體である、すると和尚は徐ろに口を開いて、此處で一場の說法を行つた、此の說法が却々振つて居る。

『マア御前達能く聞け、御前達が辛苦萬苦して拵へて呉れた百兩の金は大金であるぞ、大枚百兩と云ふ金を費して私が色衣を著けたとて、どれ丈けの著榮えがする歟、私は本年四十歲ぢや、長命しても二十年か三十年、迚も五十年とは生きられぬ、僅か五十年も生きられない、脆い、生身の體に色衣を著て何の役に立つ、それよりは今度お迎へをして來た梵鐘大和尚は、百年經つても千年經つても、死にやしないぞ、のみならず此の和尚は、朝は未明からゴーン、ゴーンと鳴つて「怠け者は早く起きて働け」「朝寢はならぬぞ」と、無言の說法をする又夕暮になればゴーン、ゴーンと鳴つて「それ今日も一日暮れた」ゴーン、「それ一日死ぬのが早く成つた」ゴーン、「油斷はならぬぞ」ゴーンと朝夕に無言の大說敎をする、かういふ和尚にこそ、百兩の大金を拋つても惜氣はないが、私

のやうな五十年も生きられない、脆い生身の體に色衣を著けて何の益にならう。』

と理路當然の說敎を聽かされた檀徒は、如何にもと感心し、これよりして一層此の和尙に歸依したと云ふことである、因に此の鐘は音色も好く、殊に右の如き遺話附きの鐘であるから、現今でも『興禪寺の鐘』と云つて、土地でも名高いさうである。

和尙裸體で笊作る

伊勢國度會郡半馬村に一箇の禪寺がある、寺號は何と稱したか、忘れて仕舞つたが、此寺は檀中と云つても、僅に十四五軒、殆んど無祿無檀と云つても好い程の貧地であるが、それにも拘はらず、現今立派な本堂が建立されて居る、で餘りの不思議さに、いろ〳〵と調べて見ると、意外にも一つの佳話を得た。

此寺に今より約三十年程以前、透樓和尙と云ふが居られた、和尙は自ら百丈禪師を氣取り、禪師の「一日作さゞれば一日食はず」主義を實行した人で、和尙明けても暮れても笊を作り作つた笊は出來ると賣り、出來ると賣りして、笊を作り通すこと、驚く可し前後三十年。

三十年と云ふ歲月は決して短くない、その三十年を一日の如く笊を作り通して遂々その賣代金を以て、現在の本堂は建てられた。

和女等ゆかんせ半馬（村名）の寺へ
和尙裸體で笊作る

とは、里人が和尙の德に感じて歌つた俗謠で、現今でも盛んに謠はれて居る。

山寺の無欲な和尙

人間に何が强いと云つて、無欲な人間程强いものはない、西鄕南洲が「名譽も

いらぬ、金もいらぬ、命もいらぬと云ふ人間程、始末におへぬ人間はないが、此の始末におへない人間でなければ、天下の大事は委ねられぬ」と云つたのは、實に千古の哲言である。

御苦勞千万

或る山寺(禪寺)に恁ういふ面白い和尚があつた、或夜一人の强盜が遣つて來て金を寄越せ、衣類を出せと云ふと、和尚はジロリと泥棒を一瞥して「ウン御前は泥棒か、此の夜中に御苦勞千萬、さあ〳〵何んなりと持つて行け簞笥の中には金襴の袈裟もある、水晶の珠數もある、行李の中に反物も二三反有つた筈だ、何なりと見取り、選取り好きな者を持つて行くが宜い、腹が減つたら、茶漬も喰つて行け、酒が飲みたくば飲んで行け、ソレ其處の德利の中に在るぞ、辨當も要るなら、麥飯だけれど、持つて行つては何うだ、御前が表へ出ると人目が附くから、後ろの山道を行くが好いぞ——あゝ佳い月だ、今晩の月は格別好い、江山風月用ゆれども盡きず、本當に好い月だ、イクラ泥棒商賣の御前でも、あの月許りは持

江山風月

つて行くことは出來まい、あの月さへ持つて行かなければ、私は滿足ぢや、あゝ本當にいゝ月だ」と云つて和尚泥棒には目も呉れないで、獨り座敷の緣先きに胡坐をかき月を眺めて悅に入つて居ると、件の泥棒は、そろ〳〵和尚の境涯が羨ましくなり折角背負ひ込んだ荷物も其場に投げ出して「あゝ同じ人間に生れ乍ら、恁ういふ氣樂な和尚もあるのに、自分のやうに泥棒をして、此の廣い世界を蹐蹐く成つて歩かねばならぬとは何んたる情けないことであらう」と忽ち一念懺悔して、其泥棒は遂に眞人間に立ち還つたと云ふ話がある、誰しも此和尚の心持ちで一生を貫くことは、到底不可能事であるが、併し時と場合に依りて、各自に此心持ちがあれば、人間到る處青山ありだ。

緇衣の佐倉宗五郎

備後の鞆町に安國寺(臨濟宗妙心寺派)と云ふ名刹がある、此寺は足利尊氏公の

緇衣の佐倉宗五郎

惠瓊長老

開基で、開山は法灯國師、後ちに彼の豐太閤の歸依僧であつた惠瓊長老の來りて再興した寺で、現今でも惠瓊長老の寺として名高い。

鞆港は瀨戸内海の一要津で、物貨熾んに集散し、往時は諸國の廻米を蒐集して米穀の賣買盛んに行はれた土地である、故に土地もこれが爲に賑ひ、市況も之れが爲に振ひ、町民の過半もこれが爲に衣食してゐた有樣であつたが、寛文年間福山藩忽然一令を下して、米穀の取引を嚴禁して仕舞つた、是れ蓋し福山町は鞆港を距る北方僅に二里、一條の溝渠があつて、鞆港に通じ舟楫の便あるを以て、藩吏米穀の取引を福山町に移し、以て鞆の殷賑を奪はんとしたのである。

鞆港は嚴令一下、一朝にして凋落し、糊口に窮する者頻々として出で、窮民は飢ゑに泣き、餓莩は路に倒る、まことに悲風慘雨の極であつたのである。

是時に方り、安國寺に一傑僧あり、名を仁山和尚と云うた、和尚町民の窮厄を坐視するに忍びず、猛然起つて彼の禁止令を撤回せしめんと企てたが、併し是は

一傑僧

容易の業でない、故に和尚は決死の覺悟を定め、先づ累の安國寺に及ばんことを恐れて、自ら同寺を退き、一の素寒僧と成つて嘆願書を懷ろにして福山藩に到りて哀訴した、和尚藩吏に面會し、件の嘆願書を差出して曰く「請ふ卿等、吾が願意の貫徹するやう計らひ玉へ、衲は天下橋(城下に在り)に於て、貴藩の回答を待つべし、若し願意貫徹せずんば衲は一歩も此の橋を去らず」と而して和尚橋上に端然不動、兀々として打坐することゝ、實に三晝夜、固より此間一食一眠をも取らなかつた。

さる程に、神ならぬ身の藩主は、斯る大事件が起きて居るとは夢にも知らず、一日城内を散策して、丘上より不圖天下橋を俯瞰されると、一人の僧が橋上に禪坐してゐる、けれども藩主は深くも意に介せず、其日は過ぎて、其翌日も亦其翌日も都合三日間、同じ場所に同じ僧侶が、默然端坐して居るを見らるゝに及んで漸く不審を起し、彼の僧は何者である」と問はれた、侍臣告ぐるに實を以てした

ので、和尚の願意は是時初めて藩主の耳に入つた、藩主が「仁山若し願意の貫徹するなくんば、吾れは此橋と共に永久朽つるに在るのみ」と云ひしを、侍臣より聞かれて、非常に感動し、「彼れの如きは仁僧である、傑僧である、斯くまでして幾百千の窮民を救濟せんとする者を、無下に排除するは宜しくない、許してやれ」と云ふことになつて、嚴令倏ち解かれ、和尚の願意遂に貫徹した。

斯くて一死以て其衝に當つた、仁山和尚の決心態度や如何と、腋下冷汗三斗を禁じ得ず、結果や如何にと、待ちに待ち焦がれてゐた鞆の町民は、願意貫徹したりと聞いて、一齊に狂喜した、これよりして鞆の町民は和尚の德を思ひ、米穀一石の取引に付き、五厘の利は必ず安國寺に納むることゝしたのであるが、然し胸宇飽くまで皓潔たる仁山和尚は、これを退けて曰く、衲には食ふに糧あり、寢ぬるに家あり、何を苦みてか、汝等が利金を貪らむ、併し强ひて衲に施與するの志あらば沼名前神社(同町の氏神一名祇園神社と云ふ)に、石燈籠を獻納せよと、現

今同社の境内に百十數基の石燈籠、兩側に聯立せるは、これが爲めなりと云ふ、以上の事情よりして安國寺と鞆町との關係は一層親しくなり、現今にては安國寺ときへ云へば、鞆の町民は何物でも快く喜捨する遺風があるさうである、偉人の薫化豈に偉大ならずや、和尚の如きは卽ち緇衣の佐倉宗五郎である。

王法不思議佛子と對坐す

花園法皇が一日宮中に、大灯國師を召し給ひ、法皇僧伽黎を著けて、對坐し給うた時「佛法不思議、王者と對坐す」と仰せられると國師は聲に應じて、「王法不思議佛子と對坐す」と答へられたので、法皇殊の外御悅びになり、それより玄談に時を移し給うたとある。

用があるなら此方へお出で

今より約二十年程以前に、某居士が南天棒劉州和尚を、一日其家に請じ、和尚の立歸へる時、和尚を玄關迄送り出し、和尚の五六歩行き過ぎた頃、居士は大音聲にて「和尚一問あり」と叫んだ、すると和尚はヒョックリ後ろを振り向き、少し腰をかゞめて、手で招く態を示し、「用があるなら、此方へお出で」と取つて除けた――矢ッ張和尚は何處かに喰へぬ處がある。

愛犬の位牌

某居士の家に一匹の愛犬が居つて、マルと云ふ名を附け、七年間大切に飼養して居た處が或る朝犬殺しの手に羅つて一棒に打殺されたから、居士はそれを可愛想に思つて、自ら「團々善狗」と云ふ戒名を附し、位牌まで造つて佛壇内に祭つて遣つたさうである、處が或る人それを見て、嘗て默雷和尚（建仁寺現管長）に向ひ、某は怪しからぬ奴だ、畜生を人間扱ひにして然かも兩親の位牌の側に置いて

居ると云ふと、和尚は頭を横に振り「畜生を人間にするのも人間を畜生にするのも、皆なその人の腕前にある事だ、他から善し惡しは言はぬことぢや」と云はれたさうである。

默雷和尚の烱眼

前節の默雷和尚に就て又た一つの佳話がある、或年の臘八大接心に、一人の居士が、頻りと參禪して、種々と見解を呈するが、和尚は容易に許さないのみか、應接頗る嶮峻で、些つとも寄り附けない、居士は愈々業を煮やし、疳癪玉を破裂させて、今晩最後の獨參には、是非に拘はらず、和尚に鐵拳を見舞ひ呉れんと、心中竊に覺悟を定め、型の如く室外で作禮低頭して室内に入り、今や和尚の前に跪坐せんとした刹那、和尚は何うして居士の心中を看破したものか、居士が今しも一禮しようとした時、和尚はアイタ、、、と叫んで、仰向けに座蒲團上に倒れ

たので、居士は茫然自失、爲す所を知らずして、遂に逃げ出したと云ふ事である。

山岡鐵舟の敏捷

兵卒山岡を狙撃す

明治元年の初夏、東海道鎮撫總督府の本營が、江戸の池上本門寺に在つた時、山岡鐵舟が勝海舟と謀り、前將軍慶喜公の謹愼する事を申述べ、官軍の江戸城に討入らざるやうと、頻りに總督府に往來する途中、桐野は兵卒に命じて山岡を狙撃させた、山岡はズドンと一發、彈丸が頭上を掠めた時、逸早くころりと馬上より落ちたから、兵卒はシメタと許り驅け附けて見れば、何ぞ圖らむ、山岡は既に麥畑に遁げ込んで仕舞つた後であつた、此處が劍禪の兩道に達した、山岡の山岡たる處であらう。

燒いたお芋

放屁一發の御詫び

橋本獨山老師(相國寺現管長)が、大阪に行かれた時、師を尊信する某々婦人等が集り、禪宗の修業がして見たいから、公案を下さいと云ふと、師は再三拒絶されたが、婦人等が頻りと望むので、然らば上げませう、別に六づかしい公案でも何んでもない、御許等が花嫁と成り三々九度の眞最中にプッと一發放屁した時、どういふ挨拶をしたらば宜い歟、これに勝るお詫びはないと云ふ程の、一句を吐いて御覽なさい、と云はれたさうであるが、誠に面白い、予の見た都々逸の本に

燒いたお芋とふかしたお芋
どちらのおならが臭からう

といふがあつた、此のおならの仕譯も、附けて見れば又面白からう、世間で仕譯の附け惡くい仕譯を附ければこそ、自由も得らるゝのではない歟。

放屁一發の御詫び

それでは天下が取れぬ

桐野利秋、一日相國寺の獨園和尚に見え

三千世界の烏を殺ろし
主と添寢がして見たい

と云ふ唄を大層自慢して見せると、獨園和尚はニヤリと一笑して、桐野さんそんな事を云うて居つては、お前さんは氣の毒だが天下は取れませぬぞと云はれて、桐野はけゞんな顏付で、それは又何うしたわけでと問ふ、和尚は言下に、乃公なぼら斯うだと、

三千世界の烏と共に
主と添寢がして見たい

と云はれたので、桐野は如何にもと合點し、他日人に語つて、あの和尚は却々油

獨園と桐野

斷のならぬ人だと云うたさうである。

鎌倉の洪川和尚

鎌倉の洪川和尚と云へば誰れも知る名高い和尚である、此の和尚は始め儒學を修め、中途にして出家した人であるが、流石は一代の名匠、幼少時代からして出藍の譽があつた、十四歳の時、或人の紹介で、藤澤東畝先生の門に入られた、先生が試みに白文の徂徠集を讀まされると、師は淀みもなく二三枚スラ〳〵と讀んでのけられたので、先生始め門下の者は大に驚いたと云ふことである、それよりして東畝の塾に在つて晝夜孜々として砥勵すること約五年、一日孟子浩然の氣の章を講ぜられる時、突然大聲を發して曰く、孟子は浩然の氣を說く、我れは浩然の氣を行ふと、此時も滿座の聽衆大にその烱眼に驚いたと云ふ事だ、是れよりして師脫塵の志彌々堅く、兩親は頻りと心配して、何んでも師の志を枉げんと

浩然の氣

禪師の出家

妻を迎へ抔して種々と慰藉したが、師は禪門の修行が仕たいと云つて肯かれず、兩親も已むなく、承諾された、仍て師は一日生別の宴を張り、親戚故舊を招かれると、親戚等は夫れ〴〵餞別を贈つたが、師は一々謝して、「我れ今父母の恩に背いて出家す、既に一鉢三衣の身なり、折角の御厚志も受くるに意なし、それよりは先づ私の志を受られよ」と云つて、自己所有の滿架の書籍を悉く分配し、且つ附するに一首留別の詩を以てせられた、此の留別の詩が却々好く出來て居る曰く、

孔聖釋尊非二別人一。彼謂二慈悲一此謂レ仁。脫塵休レ怪吾麤放。行二箇浩然一一片眞。

離緣狀

而して師はその妻女にも一枚の離緣狀を渡して、快く家に還へされた、此の離緣狀も亦却々面白い、曰く『我と汝とは譬へば纖き絲を以て、土人形を繫ぎたるが如し、今絲きれて我れ山に入る、穢土厭離狀如件』と、斯くして師は一笠一蓑一

衣一鉢、眞の丸裸に成つて、或人の紹介で京都は相國寺の鬼大拙と謂はれた、大拙和尚の門に入られた。

忽然大悟

師は大拙和尚の會下に投じ、弟子の禮を執りて、名を守拙と改められた、是れより後の師は、專ら坐禪辨道に骨を折り、或は七日の斷食接心をしたり、或は北野天滿宮の廊下の十間に入つて、人知れず徹宵坐禪せられた事も度々あつたが、未だ得る所なく、遂にその年も暮れて、翌年の春、名古屋總見寺に大會があり、大衆は招かれて行つて了まつたので、師と獨園和尚とが留護に殘り、稍々閑を得たを幸ひ、一日堂裡に在つて端坐默然、孜々として工夫して居られると、恰もその日の夕まぐれ、機熟し緣到つて忽然大悟し、從前の疑團學碍一時に瓦解氷消し去つた、師覺えず連呼して曰く、「我神悟矣神悟矣也太奇也太奇」と、仍て大急ぎで當時病中であつた大拙和尚の室に入り、斯く〳〵と見解を呈せられると、鬼大拙の稱ある和尚も、此時許りは口邊微笑を漏らして、師の言に耳を傾け、且つ諄

諄として向來を誡め、遂に與ふるに

汝莫レ以二一日慶快一爲レ是、自今須下鞭二四句誓願輪一、煥二發無量妙義一、透二過無數因緣一而、識丙得末後別有乙生涯無甲慧定坐邪定也、慎勿二無念無心了一

の辭を以てせられたと云ふ事である、此時師は大拙和尚に向つて、「禪宗には妙悟ありと云ふ事は豫ねゝ聞いて居りましたが、今日今時初めて會得が出來ました實に古人は人を欺かずであります」と言はれたと云ふことである、師の投機の偈に曰く

疎濶孔夫子。相逢阿堵中。憑レ誰多謝去。好媒主人公。

以前は酒屋の丁稚

現今濟門某派の專門道場に師家となつて、大勢の雲水を接得して居られる某老師は、元と酒屋の丁稚であつた、先年老師親しく予に語つて曰く、

拙僧は紀州田邊町近在の農家に生れた者で、十三歳の時同町の或る釀酒家の丁稚奉公に住み込みました、初めは樽拾ひから段々と商法の道に入り、大に主人にも用ゐらるゝやうになりました、十六歳で番頭と成り、店の事は一切私に任かさるゝやうになりましたから、私も若年乍ら日々二十人以上の召使を指圖して千石以上の釀酒の賣捌きに從事し、熱心に勉强しました、そのお蔭で商業も大に繁昌し、主人も亦た喜んで呉れた次第でありましたが、或年の冬、釀酒十本腐敗（一本は十石にして卽ち百石なり）させて、此の腐敗酒の賣捌きに大に苦心しました、何故千石も造る酒屋に於て、僅か百石の賣捌きに苦心したかと申しますと、腐敗酒は水よりも劣るからであります、善い酒に水を混ぜて賣るのは、賣れ易いが、惡酒は混ぜると賣れ難いのであります、それかと云うて、全部打ち捨るのは惜しいし、燒酎にするには見切が付かん、止むを得ぬから善い酒にその腐敗酒を少量づゝ入れて賣りました、そんな風で店の信用を落し、

出家の動機

在家と出家

平生の得意先きも店の前を通り越すと云ふ有様になつたから、是等を見るにつけ胸に釘打たるゝ思ひがして、嗚呼、商賣の競爭ほどウルサイ苦しい者はないと熟ら〳〵感じたのであります、それから私が出家した第一の動機と申すのは或日私は近所の寺に參詣して、時に書院の床の間に掛けてありました一軸の掛物を見て、大に發心したのであります、其軸に從レ有二其身樂一孰レ與レ無二其心憂一と書いてありました、私は其句を再三反復して、大に感じたのであります、何う感じた歟と申すと、此身在家で暮せば、勿論妻帶も出來、肉食も勝手、金錢も亦自由で樂みは多いに相違ないが、併し心中の苦しみの絶える間がない、出家の身なれば、妻帶は勿論肉食も出來ず、金錢も勿論自由にならぬが、併し山中閑寂の中に安坐して、松風蘿月を友として、安穩に暮す境涯は、迚も在家の及ぶ所でないとつく〴〵感じたのであります、乃で愈〻出家せんと決心し、此事を兩親や主人に相談しますと、孰れも異口同音に、折角丁稚から番頭まで辛

行脚遊方

抱した者が、今日俄に出家するは宜しくないと申します、大勢の人々に謀つた最後、贊成して呉れたのは只一人の醫者と、一人の山伏とでありましたが、最早私は出家と決心したのでありますから、知己友人の勸告をも肯かず、圓鏡寺の革源長老を拜して得度して了ひました、是れが明治二年で、私の二十一歳の時でありました云々。

斯くして僧と成られた老師は、二十五歳の時、行脚遊方と出掛け、初め堺の南宗僧堂に牧宗老師を拜して參禪し、後ち美濃伊深の正眼僧堂に轉錫して泰龍和尚に就き、和尚に隨從すること十有餘年、三十五歳の時遂に和尚の印可證明を得て以て今日の如く一方の大宗匠と成られた、先年某派に管長選擧の有つた時師は候補の一人であつたが、孰れ將來同派の管長であらう。

最初の發心と末後の道心

德と修行

前章の某老師は又下の如き事を言はれた、誠に味ひのある御垂誡であるから、左に記載して見る。

今日の若い雲水に申しておきたい事は、修行中は修行し乍ら德を積むことである、德の無い修行は何の役にも立たぬ、折角骨折つて修行し乍らも、德がないと人が用ゐて呉れぬ、世の中の爲になることが出來ぬ、卽ち衆生無邊誓願度の本旨に背く譯である、元來德を積むことゝ修行をする事とは、決して二とすべきでない、譬へば彼の茶人が庭の掃除をするに、箒を持ち乍ら草を取り、草を取りながら塵を掃いて、掃除と草取りとを一度にするやうに、修行しながら德を積み、德を積みながら修行せねばならぬ、爾うすれば自然と德が備つて來る兎角人間は脚下が大切ぢや。

老僧が始めに、其心に樂あらむよりは、其心に憂なきと孰れぞと云ふ句を見て發心した時の意は、世間は五月蠅い、ヤレ競爭、ヤレ不景氣、ヤレ何、ヤレ

何と言つて心を勞することが尠なくないが、出家すれば山奥に引籠つて白雲の悠々たるを望み、松風の颯々たるを耳にし、花笑ひ鳥囀づるを聞いて、閑事の心頭にかゝるものがないと思つて出家したのである、然るに出家して見れば在家よりは一層競爭が烈しい、佛敎諸宗は言ふに及ばず、基督敎、天理敎など、種々の宗敎で競爭して居る、而已ならず、檀信徒に接するにも並大抵ぢやない油斷をして居ては御飯は食へませぬ、然し修行した難有さには、今日では此競爭場裡の眞只中に在つても、無頓着に暮すことの出來るやうに成つたのは、偏に修行の得力、又同時に先師泰龍和尙の御蔭であると、竊に感謝して居る次第である。

此の無頓着で暮すと云うても、只だ安閑無事で暮すと云ふ意味ではない、時と場合に依つては、喧嘩を買ひに來れば賣てもやり、賣りに來れば買つてもやるが、幾ら喧嘩を仕ても競爭をしても、又如何なる難處難局に處しても、平氣で

通れるやうに成つたのは、偏に十年得力の結果である、イヤ以來二三十年綿々密々に修した修養の賜である。

修行には深淺がある、心の修養は死ぬる迄遣らねばならぬ、以上の閑言語も、要は左の二句に外ならぬ。

最初の發心　從レ有ニ其身樂一孰ニ與無ニ其心憂一　吾れ二十一歳の時
末後の道心　從レ有ニ其心樂一孰ニ與無ニ其心憂一　吾れ五六十歳の時

死すとも再び此門に入らず

最初の發心
末後の道心

大德寺派の管長を長らく勤めて居られた、故菅廣州老師（明治四十年八月十五日胃癌にて、京都大學病院に寂す、世壽六十八歳）は、元と但馬祐德寺の住職であつたが、或日のこと檀徒總代及び世話方の連中が、寺の事にて集會し、酒宴を開いて酒酣ならんとした時世話方等が頻りと拍手して師を呼び寄せ、酒を溫む

べしと命じた、其時師は非常に憤懣し乃公は苟も一ヶ寺の住職である、それに何んぞや、酒を溫めよとは何事だ、無禮千萬ナ」と、一時は大に憤慨したが、併し退いて一考し、「是れも畢竟自分の不德からである」と、遂に意を決して、其翌日「業若し成らずんば、死すとも再び此門に入らず」てふ、貼紙を寺門に貼付して、飄然出奔し、備前は上道郡圓山の曹源寺に掛錫せられた。

飄然出奔

斯くて師が豁然見性されたのは正に二十二歳の時であつた、當時曹源寺の師家は、近世禪林の傑物儀山和尚であつて、又同參には獨園、伽山、越溪等の歴々あり、相共に砥勵して、朝參暮請、切磋琢磨の功空しからず、一日豁然として悟得した、師法喜禪悅に堪へず、寮内より傘を携へ、僧堂内に躍り込んだ樣子が、普通でなかつたので、同參の者が「ハ、ア手が著いたナ」と語り合つたさうだが、果して見性得悟し、爾後道力日々に進み、儀山和尚の法財は、多く師の蘊蓄する所と成つた。

儀山和尚

餅屋は餅

故鈴木無隱居士が、嘗て師を其自坊芳春院（大德寺山内）に訪うた時、三應寮の侍僧が「何か御用ですか」と云つて、容易に相見を許さなかつたが、居士も其位の事で凹たれる人間でないから、「酒屋へ行くのは酒が入用、餅屋へ行くのは、餅が入用ぢやから來たのだ」と云ふと、老師は隱寮に居て、その言葉を漏れ聞き、「ウム面白いことを云ふ男だ、通せ」と云つて、初めて引見されたと云ふ話しもある。

呑湖閣

師が芳春院に入られしは、維新の際毀釋論の盛んな頃であつた、當時同院は、軒傾き壁落ち、月漏り星降る有樣であつたが、師は同院の檀越前田侯爵家を始め其他より喜捨を仰いで、鋭意其修復に努め、又其不足額は自ら托鉢して補ひ、遂に京都四閣の隨一なる呑湖閣をも舊觀に復せられたのである。

又師が管長時代の遺業として傳ふべきは、前々管長牧宗老師の發企に係る、菩提講を發展させて、現に二萬餘圓の基本金を作られた事である、師は是の如くし

便所の艸履

て、一生を寺門の經營に盡し、又日常陰德を積まれた事も、一通りでなかつた。

師が陰德の一端を窺ふ可きは、その大學病院に入院中、院内便所の草履が、何時見てもチヤンと整頓して居るので、院内の者孰れも不思議に思ひ、近頃便所の草履がキチンと揃つて居るが何うした事であらうと、一同訝つて居ると、或日の事、看護婦の一人が、師の手づから草履を取り揃へて、後ち徐ろに厠に入られしを見て、茲に初めてその理由が判り、それより院内の者師の用意の周到なるに、且つ感じ且つ恥ぢたと云ふことである。

又師は病前一方には大德派の管長、一方には僧堂の師家と云ふ身柄であつたにも拘はらず、餘暇さへあれば、自ら耒耜を執つて寮園に出で、蔬菜を培養せられた、是の如く、師は陰德と云ふことには頗る留意し、日常の行履、綿々密々、唯夫れ到らざるを是れ恐ると云ふ有樣であつたのである。

師が示寂の日卽ち十五日午前十時と云ふに、師は突然侍者を顧みて、今は何時

死すとも再穴比丘に入らず

ちやと問はれた、侍者答ふるに實を以てすると、師は更に「今日は朝の八時にお暇乞をする筈であつたが、もう十時か、午後一時になつたら起して吳れよ」と命じ、その儘昏睡して午後の一時に至つた、侍僧命に從ひその旨を告ぐるや、師は徐ろに病軀を起して趺坐し、侍僧之を扶けて漸く趺坐し終る頃、師は溘然示寂せられたと云ふ事である。

我這裡無生死

馬鹿坊主！

關山國師の許へ、或日、一人の僧あり、來つて國師に參禪し、しか〳〵と自己の見解を呈した、その見解國師の旨に契はず、國師は「這の鈍漢が！」と云つて非常に罵られると、僧は些か不平の面持ちで「某甲生死事大の爲に特に來つて和尚に參見す、甚んに因つてか罵詈す」と云ふと、國師は透かさず「馬鹿坊主！何を吐かす、我が這裡には生死は無いぞ」と云つて、便ち打つて逐ひ出して仕舞

一人の雲水

隻手の聲はどうした

はれた、——是れは一つの公案に成つて居るが、公案上の穿鑿は姑らく措いて、「僧が生死事大の爲に特に來る」と言つたに對して、卽座に「我が這裡に生死なし」と謂はれた處が、如何にも面白いではない歟。

それ見よ活きて居る

生死と云ふことで思ひ出したが、故峨山和尚の會下に、一人の雲水が有つて、まだ見性得悟の域に達せず、ウブの初心者であつた時、頻りに骨折つて頻りに入室するけれども、齒も爪も立たぬ、處が入室の度び毎に和尚が「死んで來い〳〵」と云はれるから其の雲水は是れは何でも死ぬに限ると思つて或る時入室して例の如く和尚の前で一拜し了るや、俄然仰向けに倒れて、ウーンと一唸り唸つて、兩脚を伸ばし、眼の玉を白黑させて、大に死人の眞似事をやらかした、すると和尚は呵々大笑して「死ぬ事はそれでも宜いが、隻手の聲は如何した」と問はれる

それ見よ活きて居る

から、其雲水はキマリ悪く感じ、狐鼠狐鼠起き上つて逃げ出すと、和尚は「それ見よ活きて居るでない歟」と云はれたさうである、和尚の擒縱殺活の自在なる、概ね此の類であつて、而してその雲水と云ふは、現今峨山下の一人として、令名嘖々たる天龍の某和尚であるのも面白い。

白隱の死とは何ぞ

白隱和尚が、明和乙酉の春、或る家中の武士に『死』の一字を大書して、其下に「若人得二見徹一名二眞大丈夫一」てふ下語を附した墨跡を與へられた處が、朋輩の衆何れも打ち寄り、殊の外賞翫せられたから、遂ひ思ひ付いて卽席に腰折を讀んだと云うて、それが十數首白隱廣錄に出て居る、人間は一たび捨命し去つて、大死一番底より更に復活した者でないと眞の大丈夫とは名けられぬ、白隱の死とは何ぞ、請ふ左の三十一文字に聽け。

若い衆や、死ぬがいやなら、今死にやれ
　一とたび死なば、もう死なぬぞや
生きた中は、憂きもつらきも、樂しみよ
　侍ぢやとて、死んでよかろか
口はきけど、一度しなぬ、侍は
　まさかの時に、逃げつかくれつ
臍の底で、一たびしんだ、男には
　眞田が鎗も、はも立たぬなり
生きながら、死んで働く、をのこ子は
　爲朝が箭も、つかもない事
臍輪の、底で果てたる、侍は
　世界國土に、敵あらばこそ

死んだとて、我儘するは、不覺悟ぞ
君には忠義、父母に孝

閻魔の首を引ぬけ

蜀山人の狂歌

蜀山人の狂歌は何時讀んでも面白い、彼の山人の爵世ぢやと云ふ「この世をば、どりやお暇乞に線香の、烟とともにハイ左樣なら」の如きは人口に膾炙される句であるが、此外に二三面白いのがある、曰く

往生は願ひはせねど是非なくば
八十八を過しての後
地獄より若しも使ひの來るならば
九十九までは留守と答へよ
留守と言はゞ又も使ひの來るべし

此端通るべからず

いつそ否やぢやと言ひ切てやれ

此の蜀山の歌を、再三口吟して見ると、如何にも面白い事は面白いが、併し乍ら歌意に何等の寓意も何等の眞理も含蓄されて居らず、單に一席の幇間的坐興に過ぎないのは惜しい、凡そ狂歌と云はず、川柳と云はず、何物でも必ず諧謔の中に至理を存し、嘲罵の間に大道が寓してなければならぬ、それでこそ片言隻語も光輝を放つのである。「このはし通る可らず」と往來禁止の制札あるにも拘らず、一休禪師は一直線に橋の中央を濶歩して、はしは通らないと云うたのを、只だ世間普通の諧謔滑稽として觀るは、大なる誤見である、吾人より觀れば、此の一滑稽事は、楠公が大悟徹底された明極禪師の「兩頭俱截斷、一劍倚天寒」の語と何等の差異はないと思ふ、大道は形に依らず、至理は式を藉らず、前聖後聖其揆一なりではないか、然るに蜀山人の狂歌は、何處までも狂歌で所謂幇間的坐興に過ぎない、地獄がどんな物で、閻魔がどんな顏付きのものか、更に知らないで讀ん

首を引ぬけ

だ狂歌である。乃で或る禪僧が蜀山の歌に對して、其の返歌を詠んだが、此返歌の方が、境涯見識と云ふ點に於て、遙かに優れて居る、之れは閻魔の首を引ぬき地獄も極樂も皆な悉く自己の領土にした者の詠んだ歌である、卽ち

地獄まで己が領土とするからは
使ひは來ぬぞ如何に蜀山
留守と云ひ否やぢやと云ふも面倒だ
いつそ閻魔の首を引ぬけ
限りなき命に限りなせ附けた
ねぼけしやんすな太田蜀山

禾山、青巒を一喝す

伊豫の禾山和尚は、嘗て自坊が火災に罹つた時、寺寶を取出さんとして、單身

下がれ

火中に飛び込み、顏半面を黑焦げにされた和尚で、身の丈け六尺近く、見るからに恐ろしい大入道であるが、其氣象も亦た外貌其儘の雷のやうな和尚であるから時に往々人の肝膽を寒からしむる事を行られた、或る年伊豫の各宗寺院が大內靑巒居士を屈請して、巡回布敎を賴んだ時、各宗寺院は居士が名士であり、布敎師であると云ふ所から、非常に優遇して、或る寺の書院へ通し、毛氈を敷き高坐蒲團を敷いて、大に歡待した、處が恰も其處へ禾山和尚飄然と出で來り、巨眼倏ち其光景を一瞥するや書院の眞中に仁王立ちに突ッ立つて、大喝一聲して曰く、「何んぢや、貴樣は俗人でないか、俗人の分際で老々大々と毛氈を敷く奴があるか、……下がれ」と嚙み附けた、すると居士もさる者、少しも臆する氣色なく「是れは甚だ失禮しました」と、逸早く坐蒲團から辷り下りて、挨拶をせられると、和尚はカラ〳〵と打ち笑つて、「まア夫れが當然ぢや、サア何卒か御席へ」と、復席を勸めて、先刻の雷は何處へやら、それより一層打ち解けて談笑されたと云ふ

禾山青巒を一喝す

事だ、矢ッ張和尚は何處かに喰へぬ處がある。

衲は恥かしいわい

道生會の世話人

天龍寺の峨山和尚は、生前和尚の居士や大姉が東京に澤山有つて、その爲めに始終東上せられたが、或年のこと、道生會の世話人なる某寺の和尚が、一日和尚の許に遣つて來て云ふやうは、○○老師は講座の上で淨瑠璃が出る、端唄が出る、怒罵呵咄疾風暴雨、殆んど端倪すべからずと云ふ風で、頗る東京人士の人氣に投じ皆の者が面白い〳〵と云つてゐますから、チト老師もさう云ふ風に御願ひがしたいと云ふと、峨山和尚は恰度風邪で寢て居られたが、忽ち蒲團を頭から引つ冠つて、「俺れはのう、恥しくてそんな事は云ひ得ぬわい」と、云はれた時にはさすがの世話人の和尚も、赤面して退いたと云ふことである、丸で峨山和尚を目の前に見るやうだ。

鋤鍬を隱匿す

百丈禪師

支那の百丈禪師と云ふは、吾が禪門の規矩準繩を大成された人で、苟も禪家の人は誰れ一人知らぬ者のない位ゐ名高い碩德である、禪師は非常な勤勉家であつて、其齡既に八旬を過ごして居られたが、毎日鋤鍬を執つて、禪院の菜圃に出で上堂垂誡室内警策の外は、實に一日と雖も耕耘を缺されなかつた、で、一日弟子達相議して曰く、「吾等は毎日室内にアンケラ閑として居るが、頽齡八十の老師は出でゝ菜圃に立ち一日と雖も缺かされず、是れ誠に吾等の見るに忍びざる處、宜しく師の鋤鍬を隱匿しようではない歟」と、議忽ち一決してその鋤鍬を隱匿して了つた、其日侍僧恭しく膳を捧げて餉を供するに、禪師は箸を取られず、來日又然り、斯くて食を取らざる事正に三日に及んだ、弟子達の思ふには、師の食を取らざるは鋤鍬を隱匿せるに由る、然れば鋤鍬を元の處に置かなければならぬ、

と云つて、再び元の處に置くと、禪師は乃ちその鍬を執つて菜圃に出で、歸つて室内に入られた、其日侍僧膳を進むるに、禪師の箸を執つて食を執ること常の如くであつたので、弟子達怪みて之れを問へば、禪師曰く

一日作さゞれば一日食はず

と、禪師の答は唯だ此の一語であつた、語短けれども味ひ長し、實に難有い一語である、今日世間の人は生活難ぢやとか何ぢや蚊ぢやとか云つて小言の八百を並べて居るか、百丈禪師の如く一日作さゞれば一日食はずと云ふ、此の大覺悟大勇猛心があつたならば、どうであらう、凡そ世の中に「不足」と云ふものはない筈である。

大覺悟大勇猛心

心の光り

凡そ人間は馬鹿でも阿呆でも、智者でも學者でも、老人でも子供でも、苟も生

きて居る人間であつたならば、『心』のない者は一人もない、又心のある者であつたならば『心の光り』のない者は一人もない、光りはあるがそれを出して使ふ道を知らぬ、縱んば知つてゐても仕ない人間が多い、誠に困つたものである、玆に恁う云ふ面白い話がある、支那の臨濟慧照禪師と同時代に、同じく支那に麻谷和尚と云ふ一人の善知識があつた、此の麻谷和尚が恰度此頃のやうに炎威甍を熔かすと云ふ、夏の暑い〳〵日に、居室の戸障子を明け放つて、室内のどん眞中に於て盛んに扇扱ひを仕て居られた、すると一人の小間洒落れた小僧が有つて、何んでも一番和尚を凹まして呉れようと、自分では一廉難問題と思つた問端を設けて、恭しく和尚の前に跪き「承り聞く、風性普からずと云ふことなし、和尚何に依て歟扇子を用ゐるや」と云ふ問答を吹き掛けた、此意味は「豫て和尚さんより承る處によれば風と云ふものは何處にもある、鍋の中にも味噌桶の中にも、足下にも鼻先きにも、行くとして風の無い處はない、風は到る處に充滿してゐて、

涼しかりさうなものであるのに、なぜにアナタは態々扇子をお扱ひになります」と云ふ、一種の理窟である、此の問に對して麻谷和尚が、「汝風性の普からずと云ふ事なき道理を知つて、未だ風性の普からずと云ふ事なき底の用處を知らず」成程風は何處にもあるに相違ない、けれども扇とか扇子とかを以て起さなければ、涼しいと云ふ事はないでないか、貴樣は理窟は知つてゐるが、働きと云ふ事を知らぬ奴だと云つて叱責されたと云ふ話がある、丁度此話と同じやうに人間には一つの心がある、心があれば心の光りのない者はない、心の光りは隨時隨所、何時でも放つことが出來る、何うして放つかと云へば、吾々には結構な二本の手があるから、此手を以てお年寄を按摩を仕てあげれば、お年寄は忽ち悅ぶ、然るに二本の手が有つても按摩をすることを知らず、二本の足があつても、お隣へ使ひに行く事を知らず縱し知つてゐても駄々を捏ねて仕ないのは、折角持つて生れた『心の光り』を暗處に葬る馬鹿者と云はなければならぬ、心の光りは箒一本持つても

雜巾を一つ掛けても、直ちに發揮する事の出來る難有い光りである。

結構な二本の腕

前節に於て予は手の話をしたから、もう一つ茲に手の話をして見る、此話は予が嘗て或る雜誌で見た事柄から說き起すと、更に一層の興味を增す、予は先年某雜誌で恁ういふ事を見た、最早や大半忘却して仕舞つたが、併し要領を掻い摘んで云ふと、恁うである、『現今地球上では人間が王樣に成つて居るが、人間の王樣に成る以前には蜥蜴類の或る何とか云ふ動物が王であつた——現今でも米國邊で化石に成つたものを時折掘り出すさうである——蜥蜴類と云ふと、何んだか小つぽけな動物のやうであるが、體形が蜥蜴に類似して居ると云ふ丈けで、體格は象の如く大きなもので、而もその動物には羽根が生えてゐた、此の動物は元と少數の動物であつたのであるが、何分體格が大きくて力が强く、其處へ持つて來て羽

一是一非

二本の手

根があつて空中を飛ぶと云ふ、特別の機能を有して居る處から、遂に他の動物を征服して遂々地球上の王と成つて仕舞つた、處が世の中の事は、一是一非、一長一短は免れぬので、此動物は體格が大きくて力が強い爲に他の動物を征服して地球上の王と成つた長所が、發達の極度に達した頃は俄然一變して短所と成つた、と云ふのは體格の大い爲に多量の食物を要する、その初め少數であつた時はよかつたが、漸次同種族が繁殖して地球上に瀰漫した頃には、憐れむべし最早食物がなかつた、乃で互に共喰ひを始め出して、漸次衰勢を示し來つた頃、人間が頭を擡げ來つて、遂に地球上の王と成つた、此人間が王と成つた最大の原因は、人間に幸ひにも二本の手があつたからである」と云つたやうな事を、某理學博士の書いて居たのを見たが、恁ういふ處から考へると、吾人が生れ乍らにして、具備して居る左右二本の手位結構なものはない、吾々は生れながらにして、此の結構な手を以つて居るから、その難有味を知らないでゐるが、能く考へて見ると、これ位

結構な二本の腕

金の采配も握るが尻をも拭く

結構で且つ調法なものはない、吾々は手があるから、小は戸障子の開け閉てから勝手元の拭き掃除、大は大厦高樓をも作つて住むことが出來れば、又此頃のやうに飛行機を作つて烏や鳶を尻目に掛けて飛び廻はる事も出來る、馬や牛にそれを仕て見よと云つたとて、出來る業でない、シテ見ると此の手位調法なものはないが、此の調法な手を持ち乍ら、此の手を自由自在に働かせることを知らない人間が世間に澤山ある、例へば良家のお嬢さんの如き、綺麗な仕事であると、どんな仕事でも喜んでするが、サアこれからお三どんの代りを行れ、雑巾掛けをせよ、庭掃除をせよと云ふと、大抵の者はふくれ面をする、實に自分の手の價値を知らぬも程こそあれと云ひたくなる、乃で予は恁ういふふくれ面の先生に出逢ふと、嘗て某宗匠から聞いた右の手の話をしてやる事に決めて居る、某宗匠が云はれた諸君此の右の手を見よ、此の右の手は、金の采配を揮つて百萬の貔貅を指揮し、それから又た自分の尻の穴をも拭くではない歟、それでこそ、此の右の手が貴い

のである。金の采配は握るが、尻の穴は拭けないと云つたら何うだ、そんな手は不具である、そんな不自由な手なら斬り棄て仕舞ふが宜い、肥柄杓も握るが金の采配も執る、寺男にもなるが代議士にも成ると云ふ人間でなくて、何の役に立つと云つて聞かせると、大抵の人はギャフンと參る、イヤ一場の傲語ではない。

道縱和尚の孝心

禪宗五家の隨一雲門宗の始祖、雲門文偃禪師の初めの師匠は睦州の陳尊者卽ち道縱和尚と云ふ人である、此の道縱和尚は至つて孝心深き人であつて、嘗て母の爲に一草菴を結び、母と共に此の草庵に住して居られたが、併し和尚は三寶物を以て母を養ふは、其罪輕からずとして、自ら草鞋を織つて之を市に鬻ぎ、其の所得を以て一生母に孝養を盡されたと云ふ事である、禪宗にはこれに類した話が幾らもあつて、日本でも妙心寺雜華院の祖芳和尚――此和尚は道學兼備堂々たる一

方の大宗匠であつたが、而も非常な陰德家であつて、自分等の如き不德、未熟な者が色衣を著けるは、佛祖に對して恥かしい次第であると云つて、一生黑衣で終つた人であるが、此和尚も道縱和尚の如く、三寶物を以て母を養ふは却て其罪深しとなし、毎日京都の淸水坂に托鉢し、其の所得を以て、一生母親を孝養された と云ふ話が殘つて居る、斯ういふ處が誠に難有い處で、禪宗の師家と云ふと、何だが豪傑然たる處が有つて、小節に拘々たるやうでは駄目だと思ふ人があるかも知れないが、甚しき誤解である、古人の語に「心蹈二毘盧頂顱一、行拜二少女足下一」と云ふ句がある、これでなければならぬ、卽ち氣慨に於ては阿彌陀如來の頭上を糞草鞋を穿いて、通るやうな氣慨を有つて、而も其行ひは小心翼々少女の足下を拜んで通るやうな氣持ちで居れと云ふのであるが、左樣あつてこそ、內外玲瓏、俯仰天地に恥ぢざる眞の大丈夫と云ふべきである。

八幡の伽山和尚

古人には正直な無心な處が有つて甚だ面白い、八幡（山城、圓福寺）の伽山和尚と云ふのは行業純一近代禪林の碩德であるが、至つて記憶の惡い人で、講座の時知らない文字があると、衲は此の文字は知らぬが、然し意味は斯うぢやと云つて通られた位の和尚である、此の和尚が或る年東京の東禪寺で、某華族の葬式の大導師に頼まれた時、前日から七言の偈頌を作つて、頻りと暗記されたが、容易に暗記が出來ない、後ちには侍者の方が聞き覺えて諳誦して了つた位である。

某華族の葬式

偖て愈〻葬式當日と成つた、勿論華族の大葬式であるから、貴賓紳商、學者政治家、綺羅星の如く參列して、所謂導師に取つては晴れの舞臺である、然るに和尚は前日頻りに諳誦してゐた偈頌は起承の二句までは無事に唱へ終つたが第三の轉句に至つて全然忘れて仕舞つた、乃で和尚は侍者を顧みて、「次ぎは何と云ふぢ

や」と訊ねられると、侍者も餘りの意外に呆れて、「存じませぬ」と云うた、すると和尚は大喝一聲「咄、這の馬鹿坊主め！」と怒鳴つて拂子を左右に振り、平然と燒香して式を濟まされたと云ふ話がある、咄、這の馬鹿坊主め！　とは一體誰れが馬鹿坊主か、侍者か列坐の客か、棺槨裡の亡者か、それとも和尚が馬鹿坊主か、譯の分らぬ處に、堪まらぬ程面白い處がある。

僧侶には菩提心

日本人には忠君愛國、軍人には大和魂、僧侶には菩提心、商人には商魂、百姓には——左樣百姓には何と云つたら宜いかは知らないが、兎に角吾々は其身其分其職に應じて、是れ許りは人に讓らぬと云ふ、或る何物かゞなければならぬ、卽ち僧侶には菩提心で、菩提心に掛けては決して人後に墜ちぬと云ふ、堅き大精神がなければならぬ、僧侶に菩提心なきは荆棘にいばら無く、唐辛に辛味なきと同

解脱上人

様、何等の貴ぶ可きなく、何等の恐る可きものはない、白隱和尚が其著「於仁安佐美」の中に、此事を解脱上人に事寄せて、痛く僧侶の菩提心なき事を誡めて御座るが、誠に難有き御垂誡である、曰く

昔笠置の解脱上人、常に螢雪の窓に心を凝らし玉ひけるに或る夜深更に及んで外面何にとなく騒々しかりければ窓紙に指して差し覗き玉ひけるに、恐ろしき異形の者ども夥しく來り聚り、其庵室を圍み遶るを見る、鐵爪金牙、鵠眼象鼻僧形なるあり、鬼形なるあり、互に相蹙み相啄んで叫喚怒號す、其苦患地獄の衆生の如し、一老僧あり、香色の衣に水晶の珠數を爪繰り、鳩の杖にすがり飄然と來り、告げて曰く、此等の輩は盡く是れ拘婁尊佛の時よりの智者高僧なるぞ、智德ありとも菩提心なきは皆此の惡趣に入りたるぞ、和僧も學問の功はおはせど、菩提心おはさぬ故に迎へ行きて、此道(地獄道)に引入れんとて、來り集りたれども少しく慈悲心おはして、末學の後輩を憐み玉ふ故に、捗々しく取り得

菩提心なき智者高僧

明惠上人の慈訓

る事叶はぬぞ、然れども終には引き落され玉ふ可きぞ、相構へて油斷は仕玉ひぞ、維摩法華等の大意を汲んで早く菩提心に基き玉ひてよ、とて雲霧の冲いる如く、消え失せ玉ひけるよし云云。

とあるが、極めて親切叮嚀な御垂訓である、現在此の世に於て身に錦繡を著け、口に山海の珍味を味つて居る人で、早くも既に餓鬼道に墜ち、學者政治家とて世間から持て囃されて居る人で、早や既に修羅道地獄道に落ちてゐる人は、世間に澤山ある、左樣いふ人は、白隱和尚の此の御垂訓を讀むが宜い、次の明惠上人の慈訓の如きも亦難有き垂訓である、白隱和尚のと併せ讀んだならば、得る處尠からぬであらう。

光る物貴くば、螢玉蟲貴かるべし、飛ぶ物貴くば、鴟鳥貴かるべし、不食不衣貴くば、蛇の冬穴に籠り、尾長蟲の裸かにて腹這ひ行くも貴かるべし、學生貴くば頌詩を作り文を諳誦したる白樂天小野篁など、尊むべき、左れども詩賦

僧侶には菩提心

能僧も徒事なり

の藝を以て、閻老の棒を免るべからず、左れば能僧も徒事なり、更に貴むに足らず、只佛出世の本意を知らん事を勵むべし、文盲無智の姿なりとも、是れぞ梵天帝釋も拜し給ふなり云云。

古人刻苦の狀況

凡そ何事を成すにも、懸命でなければ、決して事の成就するものでないが、就中、禪道の修行は最も此の『懸命』を要する、身命財を擲つて、「我れは法の爲に死す」てふ大勇猛心がなければ、眞個の悟道は手に入るものでない、であるから、古往今來、古人が禪道修行の爲めに、如何に發奮し又如何に刻苦精勵されたかと云ふ事に就ては和漢その例に乏しくない、白隱和尚の壁生草の中に、古人刻苦の狀況が精細に記述してあるから、禪修行者の爲に二三その實例を抄出して見る

愚堂和尚蚊軍と戰ふ

全身皆蚊子

七夜不臥

昔大圓寶鑑國師(字は東寔、愚堂と號す)の如きは、行脚事了りて後ち、妙心聖澤庵の傭山老師に謁す、問答洒脫ならざることあり、山大に怒罵して呵咄す、師不憤して山後の石上に死坐す、蚊子大に集りて道情を妨ぐ、師衣袍を解いて寸絲を掛けず裸形兀坐して夜を徹す、蚊子來り集りて肌膚を咬む、其苦其惱說く可らず、師轉々粱骨を竪起して湛然たり、恰も一人と萬人と戰ふが如し、覺えず大死一番身心脫落、忽然として大得脫あり、天明眼を開けば全身皆蚊子、徐に掃ひ落せば櫻桃の實の如し。歡喜手の舞ひ足の踏む事を知らず、歸り來りて山に謁し具に所見を演ぶ、山隨喜の餘り背後を撫して印可證明す云云。

鐵髓和尚猫兒を三拜す

又白隱和尚は同じく壁生草の中に豆州松崎禪海寺鐵髓和尚、刻苦の狀況を記して曰く、

さる程に寶鑑國師輪下の諸老は往々七日七夜不臥不睡を以て攝心と爲し玉へり

老鼠に三拜す

鐵髓老漢（至道無難禪師の法嗣）の如きは攝心の裡覺えず坐睡す、時に老鼠あり棚上より古器を落して聲を成す、之に依りて省覺し立つて老鼠を三拜して云く善哉善哉儞が警策に依りて、乍ち我が睡魔を放逐すと、又其後少しく坐睡す、猫兒あり鼠子を逐うて走る、こゝに於て驚覺し、起き來つて猫兒を三拜して云く善哉善哉儞が警策に依りて、乍ち我が睡魔を捉敗すと、此故に老漢の如きは豆甲遠信駿の間、所見實に絕代無雙なり、頂門老師の如きは尋常の清話に、予の壯年の時魔如し來り逼るときは、必ず曲池三里の間に灸せりと、古人の精練刻苦寔に貴ぶ可し。

悟後の活工夫

大灯國師の河原捨身

一休和尚が彼の有名な「挑起大燈輝一天、鸞輿競擧法堂前、風饗露宿無人識、第五橋邊二十年」の偈を其畫像に賛せられた妙超和尚卽ち大灯國師は、恰も其時代乞食の巢窟であつた五條橋下で二十年間乞食の群れに身を投じて、悟後の活工夫をせ

捨てし心

られたが、其時代であらう、國師は毎夜四條河原に出でゝ、彼の其頃流行した「試し斬り」に逢うて、自己定力の强弱を試めされた、之を國師の河原捨身と云ふ

同書に曰く、

妙超大師の河原捨身とは作麼生、昔大師は毎夜四條河原に出で草坐せらる、其頃京童の游俠者共、五箇三箇宛、此々彼しこに集どひ寄り、腰の物の利鈍を矯めし試みんが爲に、處々の廣野河原の邊を馳せ廻はり、乞食非人の類を斬り倒すこと數を知らず、四條河原も三五人窃に來り、大師の草坐せらるゝを見付け是れ究竟の事社あれ、我は一の太刀汝は第二と逼り合ひけれども少しも恐れ給はず、安祥不動端坐せらる、一士ありつく〴〵大師を見て手を合せ、斯かる殊勝の道人を殺害し奉るとも、さのみ遁れ名作の打物なりと稱せられべき證據にもならじ、結局吾々が罪過の程恐しけれとて諸共に打ち捨て走り出でぬ、其時大師に御詠あり「憂き事の猶も我身に積れかし、捨てし心の誠をや見ん」と、寔

に千載の美談ならずや。

恁ういふ處が卽ち「身を捨てゝこそ浮ぶ瀨もあれ」と云ふ處であらう、果せる哉國師は、花園法皇の御歸依を受け、大德寺に開山となり、又其竹篦下よりは、妙心の開山關山國師を打出せられた。

花園法皇

眞桑瓜

空手にして取れ

茲に又大灯國師に就て名高い逸話がある、右の如く國師が乞食の群に隱れて、和光同塵、すつかり乞食に成りすまして御座ると、誰れ云ふとなく、何んでも偉い坊さんが加茂川の磧で、乞食に身を落して修行して居ると云ふ噂を立てると、何時しか此事が天聽に達して、花園法皇はそんな偉い和尙が乞食に成つて修行して居るか、では何んでも見附け出して、就て修行がして見たいと仰せられたが、容易に役人の目に付かぬ、處が或人が有つて大灯國師は眞桑瓜が好物であると云

空手にして出せ

ふ事を知つてゐたから、之れは何んでも眞桑瓜で釣るが宜いと、或る夏の炎天に件の眞桑瓜を五條磧に山と積み、サアこれから貴樣達に瓜の施しをしてやるから誰れ彼れの容赦なく出て來いと云ふ觸れを乞食の群に出すと、眞最初に驅け付けたは、五十格好の眼光異樣に光る、見るからに恐ろしい入道であつた、彼は猿臂を伸ばして、さあ眞桑瓜を吳れよと云ふ、ドッコイ此方は只はやらぬ、「空手にして取れ」と云ふと、「空手にして出せ」と來た、此意味は、眞桑瓜はやることはやるが、手を用ゐずして取つて見よ、然らばやらうと云ふ意味である、すると空手にして出せ、手を用ゐずして出して見よ、然らば受取つてやらうと云ふのである、恁ういふ工合に擒縱自在に出るものは、到底只の鼠ではないのであるから、役人は忽ち彼の猿臂を握つて釣つて仕舞つた、果してその入道が大灯國師であつたと云ふのである、世間では海老で鯛を釣ると云ふ事を云ふが、之れは又それどころの話でない、瓜一つで無類飛切りの獲物を釣つた、誠に面白い話である。

空手にして取れ

梅林寺羅山和尚

九州久留米市梅林寺(目下妙心派の專門道場)の羅山和尚と云ふは、近世卓州家の名匠として、道譽一世に高かつた大宗匠であるが、此人が有馬侯の菩提寺なる梅林寺に住職して大勢の雲水を接得して居られた時――まだ其時は初住の頃であつたが、或年同侯の義玄院樣が薨去になつて、その葬式が營まれた、言ふまでもなく導師は羅山和尚で、和尚も一方の宗匠であるから、勿論胸中寸絲掛けずで、式の如く謹んで導師を勤められたが、何分にも御大名の葬儀であるから其儀や堂堂、其式や正々、實に何共言はれぬ莊嚴崇高の大葬式であつたが爲、和尚も覺えず腋の下から冷汗を流された、すると和尚式後つら〳〵以爲らく、吾れは一方の宗匠である、然るに葬式に冷汗を流すやうでは、平生の機用も用不着ぢや、まだ自分は修行が足りないと云つて、翌日大衆にその懺悔談をなし、それより志を立

義玄院

用不着

てゝ、八年間、肥後の見性寺に居られた蘇山和尚の處へ毎月二回づゝ七里の道を通參されたと云ふ事である、古人の法に對して親切なる、概ね此の類である。

風の蕾

或る禪寺の和尚が來客のあつた時、寺內の小僧共を呼び寄せて、誰れでもよい「風の蕾」を持て來いと云はれた、小僧共は風の蕾！　何の事か知らと、互に顏を見合せて居る中に、一人氣の利いた小僧があつて、早速扇子を持つて往つた、和尚は態と知らぬ顏付をして「どうして之れが風の蕾かい」と問ふと、件の小僧は「開かずば扇は風の蕾かな」と遣つてのけたので、和尚は勿論來客一同から賞められたと云ふ話がある、知つて見れば何んでもない事であるが、然し箇中に禪機があるから面白い。

風の蕾

一杯飲んで行くから待て

落武者

殺すなら殺せ

西有穆山禪師が嘗て維新の際東北の某寺に住して居られた頃、時偶々戊辰の役に際會して、一日幕府の落武者が息せきその寺へ驅け込んで來て、「どうか匿くして下さい」と賴む、禪師直ちに諾して匿くしてやられたが、暫くすると二三の官兵が彼れを追跡し來り、かの落武者を出せと逼まる、禪師自若として「そんな者は居らぬ」と答ふ、官兵大に怒りて禪師の首を刎んとするや、禪師は待てと差止め、而して從容として云はるゝやう、「殺すなら殺せ、……然し死出の山路は初旅ぢや、行きがけの駄賃に一杯飲んでゆくから、待て」と云ひつゝ、勝手元に行つて一升徳利を持ち來り、口からゴクリ〳〵、流石の官兵も其豪膽に驚いて、遂に空しく引ッ返したと云ふことだ、生死一如の境涯は、恁うあらなくてはならぬ。

布令

貧乏和尚

信長公と貧乏和尚

信長公が尾張の清洲より出でゝ、漸次國内を攻略し、一時覇を天下に稱して天晴れ名將軍となり濟まし、大威張であつた頃、或時自分の生れ故郷清洲に歸省された、其時領内に布令を出して曰く、「自分と同年同月同日同刻に生れた者があるならば出て來い」と云ふことであつた、が、廣い領内にも同月同日同時刻に生れた者とては唯一人の禪寺の老僧しかない、その老僧は又となき極貧の和尚であるが、併し御意とあるからには仕方がない、當時威權赫々たる信長公の御前に罷り出ることに成つた、公は扨てどんな男か知ら、天下の將軍とては自分一人であるが、苟くも自分と同年同月同日同時刻に生れた者とあれば、少くとも郡の役人か又た庄屋位の身分ある者であらうと、獨り推量して居られたが、何が扨て逢つて見れば、案に相違の水洟垂らした貧乏寺の貧乏和尚である、信長公は之を引見す

るや其和尚に言つて曰く、「オ、其方が自分と同年同月同日同時刻に生れた男か、然し見れば尾羽打ち枯らして極貧の樣子、今自分は天下の將軍であるが、同じ年同じ月日、同じ時刻に生れながらも、人にはこれ程の隔りがあるか喃」と、心中聊か不憫に思はれた樣子があつた、然るに其和尚は少しも悄れたる氣色なく、呵々と打ち笑つて、「如何にも仰せ御尤であるが、併し私とアナタとは僅かに一日違ふのみです」と云ふ、一日違ふ！　信長公薩張合點がゆかないので、「それは又何ういふ譯か？」とお訊ねになる、貧乏和尚曰く「アナタは今日では天下の大將軍であるから、幸福も此上ありませぬが、併し世の中は一寸先きが暗みであるから、明日の日になれば又どんな不幸に遇はぬにも限りませぬ、私も今日こそ貧乏寺の素寒僧ではありますが、明日になれば棚から牡丹餅のどんな好運が向いて來ぬとも保證は出來ませぬ、昨日までの事は、早や濟んだ事、嬉しかつたと云ふのも、辛らかつたと云ふも皆夢であります、明日から後の事は、その日に成て見な

一日違ふ

ければ分りませぬ、シテ見れば將軍樣と云ふのも、乞食坊主と云ふのも僅か今日一日丈げの事で、詮じ詰めれば僅かに一日丈げの相違ではありません歟」と云つた、之を聞き終つた信長公は手を拍つて感心し、「其方見かけにも似合ぬ、却々の味を言ふわい」と云つて、大層賞讃され、御褒美として澤山の御手許金を頂戴したと云ふ話がある、其後信長公は光秀の弑虐に遇ひ、件の貧乏和尚は不意の大金に有りついて、永く安樂なる餘生を送つたと云ふことだ、結局は信長公よりは此貧乏和尚の方が幸福であつた。

御褒美

達人は達觀するで、達觀すれば人生の事、要するに此貧乏和尚の至言に外ならぬ、古歌に

世の中の憂きも辛きも今日ばかり
昨日は過ぎつ明日は知られず

古歌

不足なは主人ばかり

近頃禪宗高僧方の書かれた軸物が、大層茶人間に歡迎せられ、黄檗物、大德物抔は其價も隨分不廉なる由であるが、少くとも高僧方の軸物の一つも掛けて茶事を樂しまうと云ふ者は、軸物以上道具以上の立派な人格と氣品とを具へなけらねばならぬ。

これは「禪榻茶話」に出て居る話ちやが、或る處に一人の茶人が居た、家も富裕で殊に茶道具にかけては、萬事萬端結構な品物ばかり取揃へて、何に一つ不足なものは無いと云ふほどであつた、それをば大層鼻にかけてその茶人は或日珍客を招待して云ふやう、私の茶室には茶碗茶釜茶柄杓軸物の類に至る迄、皆悉く心盡しをして集めたものばかりで、先づ私の考では何に一つとして愚かな物は無い積りであるが、若し是れが一つ丈け善くないと思召すものがあつたなら、何卒

ぞ御遠慮なく御注意を願ひますと云つた、すると珍客は隙さず、「ハイ仰せの通り何から何まで結構な御道具ばかりで感心しましたが、唯一つ諸道具に比較して見劣りのあるのは、御主人ばかりである」とやつたので、流石の主人もギヤフンと參り二の句が續げなかつたと云ふ話がある、これは其主人が道具負けをしたのである、況してや禪宗高僧方の書畫を掛けて居る茶人や紳士は是非共道具以上軸物以上の氣高い品格を持たねばならぬ、縱令坐禪は修せずとも、心さへ正しければ禪の眞理に叶ふのであつて、六祖壇經の中にも「行ひ直ければ何ぞ修禪を用ひん」とある。

佛教と耶蘇教との相撲

明治十八九年頃彼の耶蘇教が一時隆盛を極めた時、或人が鐵舟居士の處へ、坊主と西洋人とが、角力を取てゐる繪を持參して賛を請うた、これは佛教と耶蘇教

相撲

とが相撲を取つてゐることを諷したのである、居士はそんな贊は出來ないと云つて一時斷られたが、強ての事に止むなく筆を執つて、

負け勝ちは何れにあるか知らねども
本來空が勝とこそ知れ

本來空

と贊せられたと云ふことぢや、此歌が誠に面白い、吾々の心は丁度鏡のやうなもので、漢來れば漢現じ、胡來れば胡現じて、一として心鏡に映じないものはないが、映ずると又すぐ囚はれると云ふ習癖がある、酒の好きな者は酒、美人の好きな者は美人に囚はれる、が、本來空と言ふ處で働いてゆけば、囚はれると云ふことはない、囚はれなき處に至つて初めて一國の政事も料理が出來るのである。此修行をするが佛法で、つまり佛法が勝ちと云ふ意味である。

佛法と世法

平常心是道

佛法と世法

支那禪門の俊傑と稱へられた趙州和尚が、其師南泉禪師に向つて「如何なるか是れ道」と問はれた時に、禪師は「平常心是れ道」と答へられた、卽ち平常心が卽ち道であつて、道を離れて平常心なく、平常心を離れて道はないと云ふ意味である、世間の人はどうかすると、佛法と世法とは別なものゝやうに考へてゐるが佛法と世法とは、二にして一、一にして二である、古歌に

佛法と世法とは人の身と心
どちらが缺けても立たぬなりけり

正見と邪見

鳥尾得菴居士が少壯時代に、今夜は女郎買を仕ようと、或る日のと、窓に向ひ机に凭りて考へて居る處へ、雌雄二疋の蠅がブンと飛んで來て、面前に於て、ブンと交尾してブンと去つた、之れを一瞥した得菴は、ハ、アー今夜乃公の女郎買

淺間しい了簡

もこれだナ、苟くも人間に生れて蠅的交尾を仕ようとは、淺間しい了簡だなと感じたら、今まで燃ゆるばかりの情熱は、火に水を掛けたる如く消滅して、其後も情慾發動する時は、忽ち此事を聯想して、辛うじて操行を保つたと云ふ話がある、是れ高等動物が昆虫に對する正見ではない歟、然るにあの小さな虫けらでも自然の天賦は如此だ、況んや吾人々類は猶更の事だと主張する、自然主義とかゞあるさうであるか、それが卽ち邪見である。凡そ一の事物に對して觀察は種々に分れ從つて其觀察も各々論據はあらうが、注意しないと邪見に墮るから油斷はならぬ然し是れは普通人間に望む事柄で、和尙さん達には却て一年に一二回の交尾期にのみ、淡泊な蠅的結婚をやらかす方が宜いかも知れぬ、それとも釋迦達磨以上の人物なら、此の限りに非ずだ。

蠅的結婚

宗教心が無かつたら泥棒だ

宗教心

京都で明治の初年に、十人組白浪と呼れた者の一人が鳥尾得庵居士の高臺寺の一得庵へ頻りに出入する、乃で同居士に親近する人々は大に之を嫌つて、「現在泥棒はせぬにしても、强盜犯で名高い者を親しく近附けるは、自然吾々の面目にも關はる」と、居士に其意を申述べると、居士は笏を以て席を叩き、「泥棒と乃公と何處にどんな相違があるか、乃公に宗教心が無かつたら、彼れ以上の泥棒だ、彼れに宗教心があつたらば陸軍中將鳥尾小彌太と擇ぶ所はあるまい」と罵倒したので、其人は無言で引きさがつたと云ふ事だ、悲しい哉、現代の人には此宗教心が無いから困まる。

位人臣を極めたら注意しろ

或る夏の暑い眞最中の夜半に、伊藤春畝と鳥尾得庵とが滄浪閣で、餘念なく碁を圍んで居ると、俄かに庭の隅まで明るくなつた、これは春畝の命令で、庭園の

位人臣を極めたら注意しろ